

日間瑣錄

大正十五年一月上浣起筆

十

特別
14
1919
378



日 記 録

大正十四年十一月十日

○拙著隨筆類山陽中五敗敗々おんしりおん
 改刷行に取のふし、年末此類の出版の大受振店
 東京堂が新交、拙著しに在り、發行のよいか
 物二三種と致る、拙著が中一と有りて、
 人氣を盛し、比まである、多くの坊元一時大の
 九、よ、ハ、東地、き、續、か、す、ロ、又、と、を、を、減、す、る、か、例
 であるか、拙著ハ、ハ、説、を、の、こ、と、く、大、受、を、一、時、又、見、
 いか、問、あり、ま、る、と、行、き、ま、る、と、裏、地、を、あ、ら、は、せ、
 ぬ、と、出、版、部、の、向、こ、あ、つ、て、お、ろ、こ、の、報、を、し、て、お、ろ、こ、



ンゲンド・ンアヴ (展佛回二第) 像肖の供子

とたのすやの語あり位かせし其くさか斯くあらんれ
る也と云ふはしがき一枚浅半月の撰文也 十月
廿四日

○十月十九日都下の書肆聯合の回方陳列を主たる
り(在美俾由印を於也)此の寒氣激甚をうし七子相
自動車を託り物に懐んび過る。今心のもや人
とあるをし備ふる教諭を贈りひる由特々録す
べきに左の三行とす

- 一 淨瑠璃姫十二巻とすし 三冊
- 一 妻古多村伝即自筆雜物 三冊
- 一 田中訥堂の巻の子くさ 一冊
- 一 十二巻とすし「八」の稀款の巻とすし七 價頗る高し

ち月を拂ふ位節の旅物、千代田朝倉鴉片始
末芽を自づしとすともまの例の細書の執筆よ
べきも目若るあらざるか故に深く其るる又是く
す、訥堂の巻のひるさすも珠を又あるは比今心
也此在本を得ること難し、北方の川崎の席由り
也也、此外に寛文版も見やれ物終元禄刊
歌仙繪物を得んは場あり、荒平の歌
丁あり、兎角アキタラ不附世の辨松バラツク
店に之あり獨り、北浦初めり、一と寒を著後、且
の不満を感あり、後暖の巻の執筆七六一風也
十二月廿四日追記

○去る六日夕刻ラジカは先が攝政女官妃の分悦

内親王降誕の支報を傳ふ此日十時吾印刷會社
社評議中一決死の職工十數令此に戻り来り十一時
を合圖に輪轉機三台を動し其聲四隣に響ふ
是れ亦産聲を揚ぐる事、而して再月皇宮の
産聲は女性をも吾社のと男性も
○評議の中訖ハ工業倶楽部と令休り九行ハ
余ハ前崎支店と此ハ本社橋上ニあり夜十二時工
業倶楽部もも電流あり仲訖談利順境に近
む可なりと産聲克と余聽之之れを位ちか思ハ
くく更移るは從ハ漸やく不利の淡州に陥ん
と果して悲慘の事ハ判、追て面倒起り一時をこ
き二時とさき三時とさくるも決て氣、電流あり

法利を停止して明日に返ハさんと余之んを不可とし
夜を徹するも法了目を要すと其の蓋し中訖談
利の訣ハ漸續を不利とし一氣呵成を可とするが故
り、余の意氣昂る振ハ四時、到り電流を後
判不利に陥るとの報あり乃ちワリリングを令し前
崎支店と共ニ令休而、行き聲を與ハんとす
行けば既ニ事、曉を夫し亦奈何もすりし、
竟仲訖ハ淺黄電と有す、其の黑白を正す、其の
く、諦らあるのあり、一夜徹宵本社にあり
深更都市中を疾馳する、既往地多あり也
○日本の労働者未だ細碎なり其の心事ハ卑
陋なり、彼等ハ西洋の労働者の如く堂上より

争ふを為さず、彼等ハ故首者ニ對シ、現金を以
 ための、亦罷工中の賃金を以て、勤王のハ洋議中
 彼等ハ擅まじし、其の経費も亦七と云、在野のよいこ
 と限る、^理、^意、^事、^主、^張、^す、^る、^に、^於、^て、^實、^ハ、^沙
 汰の限る、



の大隈内閣の時、彼等ハ解款を
 信任を興論、^{大隈伯}、^彼、^後、^援
 命、^託、^り、^余、^等、^令、^長、^等、^此、^令、^ハ
 究、^端、^ハ、^上、^の、^精、^養、^軒、^を、^令、^備
 一、^都、^下、^有、^力、^の、^實、^業、^家、^を
 大隈者、^招、^以、^下、^閣、^僚、^文、^と、^政
 兄、^を、^海、^外、^前、^の、^迄、^早、^大、^の、^國、^者、^館
 長、^を、^請、^し、^よ、^る、^司、^令、^者、^を、^令、^備
 上、^ニ、^立、^つ、^此、^等、^を、^以、^即、^ち、^免、^る
 此、^ハ、^大、^隈、^者、^協、^記、^料、^を、^令、^備

得七六五ノ叔也

粗大です。本會同人安田氏の文庫に在つた洒落本掛袋一綴の中には本書の袋も完全に保存されたのでしたが、惜い哉大震災火災の厄難に罹りました。

吉原戀の道引解説 (ついで)

延寶度の新吉原に關したる書籍の多きは、その繁昌を證據立つる一例とも見らるべし。壓迫をうけ居りし江戸の町人等が其囊裡に餘裕を生じて擡頭し來り、金力によつて佩刀者流に對抗せんとせし機運に乘じて、これら幾多の娛樂を主とせる書籍は刊行せられたるなり。按ふに元吉原は元和四年十一月の創業より三十餘年間其根柢を固めたりし上に間近く葺屋町の劇場等を控へたる盛り場にして、足懸りもよく繁昌せしなるが、轉地後の新吉原は人煙稀薄なる僻地なりしが上、明曆の大火災にて市中不景氣を極めし時なりしかば、遊客は上流階級の武家か富有者を主とし、民衆的歡樂郷とまでは發展してあらざりしなり。されば民衆を引附けんには案内書やうのものゝ必要ありしなるべく、乃ち割合に交通機關の發

達し居れることをも知らしめんとために、駄賃付け迄も書き記せる本書の如きものが出でしならん。彼の單に吉原にて流行せし唄を記せし既刊『吉原流行小唄惣まくり』の如きにさへも、本書と同じやうなる畫を挿入して駄賃付けを添加しあり。其値段が『戀の道引』よりも高きは、斯かる賃銀は次第に騰貴するを例とするなればならん。延寶末の刊行に係る『吉原流行小唄惣まくり』の方高直なるは怪むに足らず。

新吉原の全盛は、延寶度が絶頂として一段落を劃せり。其著しきは鷹揚なる大名の遊樂、即ち大盡遊びなるものが衰頽せしに因す。これよりさき寛文五年に、風呂屋女を廓内へ收容してより散茶女郎なるもの起り、其勢力次第に盛んになり、細身造りの佩刀に餘情羽織の姿などは寂びれて、寛文以後の武家の跋扈は漸く元祿以後の町人の吉原に變化せんとせり。すなはち寛濶出立にて白馬に跨りし若殿原の伊達姿は延寶度にて段落となりぬ。こは堀田正俊が例の大和の改革にて大斧鉞を揮ひし結果なり。されば

特り吉原のみならず、總てに涉る社會政策の反影なれども、其吉原に於ける衰退の原因は、右の天和の改革に於て武家が特に著しく拘束を被りたるにあるなり。この打撃にて佩刀者流は嚴しく其放縱を取締らるゝに至りしが、町人は之に反し、恰も漸く景氣づきて其全盛期に進みつゝありし際なれば、頗る町人向きに組織され居りし所の散茶女郎の發展は自然の結果たり。元來散茶女郎なるものは遊客を選び嫌ひせず、たゞ命これ從ふのみ看板にしたれば、江戸の遊女氣質と從前は彼れらの誇りとしたりし意地もなく張りもなく、また戀も情けもあらざりき。然るにも拘らず本書は、當時の江戸遊女の特質を度外視して、特に『戀』てふ文字を使用して『戀の道引』と題したるは如何なる故ぞや。當時の遊女なるものはすべて『戀』の標的とはなりをらざりしに、ことさら立ちて戀といふ字を冠せしは如何。延寶度には遊女風習一般に變化して、悉く散茶式になり、意地の張りのといふ氣隨氣儘の行爲、即ち吉原風の遊女氣質は薄れ行き、たゞ性慾を満たさしむる目的物に

墮落しつゝありしなり。延寶著作の畠山箕山の『色道大鑑』中寛文格といふものを舉げて、遊女も買ひ手も悉く墮落せるよしを指摘し、寛文度に於ける遊女の買ひ手こそ傾城買ひの正しき姿と言ひ居れるにても明かなり。遊客の推移は江戸のみにはなく、各地方の遊廓に於ける傾城買ひ亦た一變せし時なれば、上方詞でいへば本大盡、江戸でいふ殿様遊びが延寶以降は影を匿したり。こゝに於て特に『戀』を看板に掲げて遊客を釣寄するの要ありしならん歟。遊客の氣分も又其種類も自然と著しく變りしならん。吉原を案内するに殊更に『戀』の字を用ひ『吉原戀の道引』としたるは、かゝる理由かとも思はる。さて内容に就いて見れば、當時吉原へ通ふ交通機關には、馬、船、駕籠の三つあり。陸路によれば馬あり、駕籠あり。馬にて通ふ者には彼の六方出立の寛濶を競ひ白馬を選むなどの仰々しさもありき。船路をとれば輕快にして目立たざるより、本書に據りて見るも、一般の意向が船に傾き居る如し。こは唯だ華美を避けコツンリ通ふといふ風俗上より來たる

にあらず、新吉原がこゝに轉地後四年目の寛文元年六月九日の觸れ書に『新吉原へ参り候者乗馬だちん並乗物にて参り候事御法度候間其通り町中へ申渡候少茂爲背間敷候以上』猶同じ八年三月吉原町への觸書には、新吉原の家作り、嫁取等より衣類の制限ありて末に『新吉原へ馬加籠に而通候者よせ申間敷』とありき。かゝる禁令は出でたるも猶馬にて通ふものなきにあらねども、禁令後は流石に土手の入口道哲の前にて下馬し、土手を乗り物にて通ふことは憚りたり。さればこそ圖中の駄賃馬に和鞍を置ずして荷鞍のおきあるも、禁令を避くる爲に運送馬に仕立てたるならん。然し馬にて通ふことは元祿の中頃までありと柳亭種彦が中村佛庵に送りし記中にも見ゆ。

又本書には遊女を局。散茶、格子、太夫と掲げ居るが、吉原の事をかくに太夫、格子に重きを置くべき筈なるに、より以上に局、散茶を詳記するを見て、此頃の形勢が既に散茶や局へ通ふ者が多數を占め、吉原の書籍を讀む者もまた其方面にありしもの

所のみにて遊女の名なし、今之を『戀の道引』の刊行に最も近き延寶三年版の『吉原大雜書』中の遊女の紋所に對照すれば、「七寶中に紅葉」三浦屋高雄「木瓜」同坂田「花筏」同みよし、新町久右衛門内金太夫「三巴」三浦屋多門、新町右兵衛内清原「三ツ葛」三浦屋薄雲「十六瓣菊」三浦屋千代能、山本や初花「三蓋松」すみ町權右衛門内江口、新町三左衛門内たんしゆ「紅葉」京町三左衛門内小源太「九枚笹」山本屋勝山「花桐」三浦屋たんしゆ等の外類似のもの六七個を發見せしのみにて得る所多からず。而してこの伊達紋の附け初めは承應の頃なる由『東海道名所記』中にも見え、之を附け初めしは遊女なりしが間もなく野郎にも移りぬ。初めは其形整はずザマなるもの多く漸次その形の摸様化し、加賀紋に至つて完成せることは『稀書解説』第三編「野郎蟲」の項に述べたれば畧す。

なほ畫面について少しく説明すべきは、十一丁裏より十二丁表へ渡る圖がこの頃「うづら」と稱したる局見世なるべし。格子の横棧木は畫面には明かなら

四
如く、既に延寶の『戀の道引』が刊行さるゝ頃より元祿に魁けて段々町人の方面に迎接し行く變化が見出されて面白く感ぜらる。これらは一時に通貨膨脹の影響をうけ民衆經濟の急激なる發展に促がされし結果なれば、假令天和の改革が實現されずとも吉原は町人本位に移るべきを暗示せり。然れども畫面に於ては未だ武士が主として取扱はれ居れど、總ての狀況よりして太夫の消滅期の來たるべきことも思はれ、吉原の低下し行きし光景も想像されざるにあらず。また上欄に持出したる遊女の紋所に就ては精査を要すべきものなり。吉原の案内書とれば内容の散茶、局に傾きたるにもせよ、太夫と格子が幾許あるやは記さざるべからず。故に此紋所がそれかと思はるゝが、これを參照すべき材料なく遺憾ながら不明なり。吉原の細見は細見圖を初めとすれども、それよりも古い所に遊女の紋畫しあり。但し下級の遊女には及ばざりし如し。されば吉原見物をするもの此紋畫しを手にし、あれは何れの太夫これは何屋の格子と其名を知るの便ありしなり。本書にはただ紋

五
ざれども三本あるを例とし、之を五寸局と云ひ揚代五匁なりき。次の十二丁裏より十三丁表へ渡る圖が「つり格子」と稱したる局見世にて、格子も荒く横棧の木も一本なりしは明瞭に見らる、これを三寸局といひ揚代三匁なりしが、此五寸局も三寸局も元祿になりては消滅し居れば、元祿以前の局見世を知るには此圖によらざるべからず。また十三丁裏に妓夫臺のある圖あり、これ散茶見世の掛りにて後に所謂小格子式なり。また五丁裏の駕籠の圖は天和の法度以前のものにして後の四手駕籠とは異なれり。六丁表十五丁裏に頭より羽織を被れる圖あり、これ當時の粹客が好みて着し、且つ被りて伊達を競ひたる狀にて、この羽織を餘情羽織といへり。また八分ざりの熊谷笠など、いへることは物の本にも見ゆるが、それは武士などの面深にかぶり顔が見えず縁に反りのある編笠にて、即ち十一丁表及び十六丁表に武士の被れる編笠これなり。この編笠の稱は時代によつて名を異にし、万治の頃は玉ふちの笠といひ、寛文度には松坂笠と呼び、延寶に至りて熊谷笠と稱したり

と云ふ。

要するに本書は僅々廿二丁の冊子に過ぎざれども、元祿以前の吉原を研究するには缺くべからざるものにして、吉原の變遷より江戸の世相を見る好資料なり。且つ本書を開いて畫のみを通覽しても興趣自から沸き、當時の狀況髣髴して延寶の昔を偲ばしむるものあり。

吉原戀の道引の中の

紋章について

前回配布しました『吉原戀の道引』の第三丁表と、第十三丁裏とに御紋章類の紋章を載せてあつたことに心付かず、印行部数のうち若干を須布しました事は、發行者が恐懼に堪へない所でありませう。殘餘部数だけは其筋の嚴達に依り該箇所を切取りました。削除以前に配布済の分は、各位に於て御切取下さるやうに願います。既に個人の手へ渡つた品は、其筋から干與されないさうですが、徳義上御懇請する次第です。發行者から其筋へ提出した始末書には、

會員各位へ懇願しました事をも附記して誠意を表しておきました。本書原本の發行された時代には幕府の威勢旺盛で、苟も葵の紋所を何かに用ひる者があれば直ちに嚴罰に處せられたでせうが、其他は何を用ひても問はれなかつたものと思はれます。今日の頭を以て考へると、遊女が菊花紋章を濫用するとは全く意外の珍事です。

用紙について

初代廣重の畫稿『鐵炮洲燈籠略圖』の複製に用ひた紙は何と云ふ紙か、と或方からお尋ねを受けました。御承知のない方だけへ此紙上申で上ます。あれは石洲半紙又は茶半紙と稱へてゐます。石州といふのは石見國から産出する故で、茶半紙といふのは茶色を帯びて居るからでせう。今回の配布本即ち『正直ばなし』卷三外一冊もやはり石州半紙を用ひました。此紙は土佐半紙よりも寸法が伸びて、色も白くない爲に複製用には最も適當してゐるのですが、一俵(六匁)の中に不同のあることは申す迄もなく、一

○事紀坊河の同者と認るる後、右左の如し

一 振濯録

一冊

あ政年間大和宮本通理の
若くは所土師の源流を考
証し其の定を以て論じたるもの
り土師の原所謂の特殊
部也此者漢文を大槪
盤活浅吟梅を存得南岳外
敷序あり此者通保抄附地
と卷首にあり漢文を和得し
るもの歟

一 歌麿名歌書目録

一冊

此書未だ山八長尾重信の編す
る所歌麿初代二代の稀絶
狂歌又珍奇の名代よの返元
こよふ分類して目録を伝へたる
こそ奇本なり

一 玉鉾万首

一冊

此の歌集とて珍らしき
たるものありしに伊藤墨野の活
字に刷行さんたる本に字多
味あるを名ふ

一 東教要鑑

一冊

十二行

一 日本書紀鐵字内考

一冊

耶蘇教の大成を因治年間支那
に編著したるものを上中下三巻
合一冊日本に於て覆刻したる也
文政年間大関増業の編に倣ふ
本に就て香紙の巻魚を正し
その也 巻末に林本者小跋あり

一 割書教程一級者花巻

一儀大文評判記
三都役者帳簿
より評判記

此等の花巻今も珍奇を辨類と
云扱はる

最上膳味

「みよより」

風流と衛生と美味とを兼備せる最上膳味たる「みよより」は、大阪能楽壇の巨匠稲田謙也氏が、恩師孝養のため、研究製出したる、世に無類なる副食味料にして、氏の道念と藝術的鑑賞の高識より工夫せられ、「味の美の極は、即ち是れ養ひの極なり」との原則を具體化したる珍味なれば、凡そ食膳の伴侶として酒に宜しく、茶に宜しく、飯に宜しく、上戸下戸、老幼男女を問はず、會席の雅餐はいふも更なり、洋食のあと、酔後の茶漬、人若し一たび之を口にせば、造次顛沛にも離しがたきは請合ひ、草を別けても詮議して之を帯めんとあせるは必定、おがむから賣つて呉れといふほどの渴仰を起し、門前市を爲すに及び、さらば人助けの爲めなりとあつて、隨喜渴仰の人々にのみ頒ち買らんかと、茲に製造販賣することゝなれり。

此珍味は、前年一たび東京にて發賣せしも、障ることありて中止せるを、その當時一たび之を味ひたる人々の今に忘れず、この美味の中絶を歎いて、再興を促すこと切なるを耳にし、試みに造て國醇會席上に提供し、列席諸名家の鑑賞を乞ひたるに、果して一同手を拍て之を激賞せられ、「廣く世の爲に再興を熱望す」との推賞を博し、終に再興願實を決するに至る、願くは大方の競つて御賞味あらんとを。

「みよより」の内容

二十八種の野菜及香料より成り、各材料に對し各々乾燥度を異にし、煮沸また文武の火加減むづかしく、着味にも非常の苦辛を要す、製作の複雑困難なる言語に絶す、此面倒を凌いで出来上ればこそ、たべる人には無條件でおいしいことになる、而して此「みよより」は、元來が一の副食物にして藥劑ではなけれど、各種材料の自然配合と、調味の科學的作用により、大抵な胃腸病などは、忽ちに治癒するほどの衛生食餌なれば、食美の賞飮、一身の保健は勿論、一家の經綸と和合のためにも、また欠くべからざる經濟的適品なり。

下谷 鶯谷

發賣元

茶舖

香

風

園

電話淺草 六〇九一
六九三四 番

此如、より今ハ査察と云うたり余の試合するハ四條
合庫一、田中智尋が自知のものをもち来り欲らば
り、よき、田中氏のものよりよきを極め味のよき

十二月廿百記

ふよりしをれしかつ友人のうらまへに須らく為め土饅
買入り、此味をえと味の聯想を撰書し尚さ
この朝鮮料理也、朝鮮の料理ハ唯某の化
合るもの多し、中ニ從々念入りのものあり、
但ハ底のへきハ漢方の藥具と、帯ふつ、在
り

○昨起一時頃、抄きあり枕頭の日本人新報誌を取つ
て漢文、中ニ「護法ハ神也、島惟通」と題す、一篇

百頁に及び、湖南事件と明倫とを詳叙し、傍ら
明倫の履歴と及び、法天分派波瑛音の在編
と、其の様子の材料、以て、日記記述を併せ、其
法証書、記すに據り、考據を定むる、余通後
ニ時台に及び、頭、其感と云ふ、事ハ湖南事
件ハ、明倫の上の大事多し、或ハ此事件の爲め、露
の害怒を蒙り、我國を傾くことありし、其の
可らざる底の大事事件と云ふ、朝野震駭、不尊
●孰しく其痛を露を子と称す、法ハ、其の時
の内、其ハ西御内折、從道、山田法折、顯義ハ、狼狽
し、湖南と云ふ、法官を以て法を相けしめんと
し、物故駭然、日露の關係、如何と云ふ、行

へきやを夏夏震すしあやしき事一なるよひとう時の松方内
閣の又もあつてさう、而時の日本ハ必力に松方將
ル方方に松方利彦有るの故にあらざるさうし、此の
田家取亡危急の時とせり、俄然法を復すを動
かす所は必力次第況張る人ありて、漢よりとも
強項内閣の衣冠と退け得たものと、今松方を
不忠儀之感せしむる程さう、余ハ此の件に記し
際後責新也の主義とせん、又命かたさうに
関する社説を筆しし事とあり、必力もさう
花より件に關して河東の合流の後をせよとあり、
晩年より大隈侯邸に志むく人ありし事とあり、
湖南事件の後年を記し日清戦役あり、戦後

三國干渉あり、その後湖南の負傷者を皇帝とす
る露國と云ふ戈を交へて者、權利に悔しむること皆
歴々金又つから視聽する事あり、思入の實日真に感
假深き木樨の如き歴々あり、○事伴ありて後二
十年を記さる、○日露國運のおもて亦甚しい
うり、○湖南に傷ける露國も、○世界戦も、○露
一して一朝革命あり、○非命に仆らるることを思入
露國の非運も亦に驚くべき事あり、○露國の子
の我邦にありし時、○世界の露を懼るべきと甚しく
あり、東洋に未だありし何事か為す所ありしとあり
り、吾が一此查の売拳を出さるも必竟愛國心と云
ふものあり、○その淺慮さうし、○と言ふ事あり

高時多の平極に満ちる。寧ろ奇蹟といふ可き事
然し此事件を以て實に構ひ砲烟の間に打見あるの不幸
起りしことを試み我四圍の内閣員の甚く害をせしこと
彼の侵略を委しんば知る可き事也。斯る時に
方り此然立つて勝を屈せり飽きず復法に終
始しつるの見地唯論する人々想入るる氣骨月
類の實に愛護に餘りある。吾人の新志記ある事
しかるに思慮の甚く目詳悉す。而も其の秘を
こぼさず云は多し。而時政府に特、新志の七條を
一其の多きを公載すること禁じたり。今日
本人の執の記を就し初めを知るの事実あり又記
帳を新する事功あり、聊、之れを叙せんか、見地

ハ高時大政控訴院をなす。大審院も、榮轉
して新の法に亮変の起り也。偶れといふ天孫の
國家の司法権を擁護せしむるは、此の執任をな
さしめたるの執事あり。而時の松方内閣の震
駭揚々を知らず、皇室族に對す、刑律を以つて犯
人に擬せんといふ事、内閣の成の論よりひとり陸奥
うみ此個条ハ吾皇族の如擬せしむべきと論し
たる由りん。是れも後より其説を根付せしとあり山
田司法の如きも此個条を以つて擬すべしとあり又
外務省の如きも此個条に向て早計すも此個條を
犯人に應用することを得しめしなり。而時之檢事
須田三好退翁ハ政府の使に任して個条を解し

公訴を起し、言ふ事も多し、裁判長堤正巳以下の
判官十六政略の奴隷とす、最初、時々曲解論者
多し、但し見路のみ最初も昂然として其の曲解
を鳴らし、或回か首ねん、日本閣僚の勸説を交
けても聴かず、終に大津に臨時大審院の開か
し、並び、自身も出法して提裁判長等、説き、遂に其
死を改め、其の死、此も電信を内閣に内報さる、
や西郷内相、山田法相、狼狽して大津に赴き、見路
を面責し、然るも見路は終に聴かず、其の委曲、
日本人の記す、詳悉あり、後、後、冬、日汗を
擲く、あるものあり、政府、窮乏、見路外掛判官と
て陛下に拜謁せし、陛下、諭示を以て内義

るく、と兼し、然るも聴ゆる陛下、注云、せよと仰
せ、ん、等のみ、う、法を曲げよと仰せ、ん、さうし、政府、亦
司法官法を枉ぐる能い、あ、ん、ハ、己、を、得、ず、戒、令、を、中
き、軍隊を以て犯人を愛せんとす、此も内閣大臣の
見路との問答中、ある見路、之、を、わ、り、犯人、既、に、捕
に、就、き、司法の手を、身、を、あ、る、人も、軍隊を以て、愛、理、す
心けん、斯の如き、ハ、窮、の、ハ、窮、と、一、天、に、附、ち、政府、の、徳、向
而、後、判、官、を、頭、使、し、是、を、し、と、非、を、遊、げ、ん、と、し、た、
ハ、これ、も、亦、見、路、に、依、つ、て、破、え、ん、と、す、而、時、大、津、に、赴、ち、
き、や、西、郷、内、相、ハ、怒、氣、面、に、溢、ん、見、路、が、大、津、驛、頭、
内、相、法、相、の、来、帰、を、受、く、際、見、路、に、對、し、て、放、ち、た、
罵、言、其、其、ハ、大、臣、に、あ、る、ま、じ、き、失、言、さ、う、し、か、僅、ら
云、内、相、の、

山田丞相の居中の言に依り事無きを得たる程を
見ゆれば此際、（？）有りけりおとす、男児の真骨月頂をあら
りしと應酬し、（？）也、當時の淵僚は只及西條國の激
怒を恐る、（？）河上も、（？）河原の事、（？）船東京を砲撃
すべしとの夢見也、或回が村方、（？）以下見ゆる
す、勅後、（？）法の神聖にあること、（？）國家の
存亡も、（？）難しと、内閣が如何に恐る、（？）病に初む
はん、（？）を死すべし、（？）此の困難に、（？）一七、（？）守る事
り、（？）難を冒し、（？）者法権を、（？）権後、（？）司法史上、（？）正さ
ゆべしと、（？）一大汚點を、（？）免かん得し、（？）め、（？）見ゆる切
ハ真に偉多と、（？）謂ふべし、（？）大隈侯、（？）見ゆる、（？）古折の、（？）際
考考、（？）法え、（？）ことあり、（？）見ゆる、（？）男爵位を、（？）授かるべ

きこの事なりと、（？）而して授かるべしと、（？）授かるべし、（？）此の
硬骨、（？）原因、（？）見ゆる、（？）常人、（？）あり、（？）衆、（？）ハ彼、（？）に、（？）於
て何かある

大正十五年一月三日記

序のうし附け加ふる、と年ハ亥の罽が、ある
宣ハ強よいよああると云いんとある志、うし
船花久に、席、た、こと、を、聖、た、奴、席、ハ、久、未
腰、病、その、病、畫、い、階、ん、か、た、ふ、つ、と、出、あ、る、と
腰、病、が、あ、る、か、ら、た、い、る、人、を、ま、ま、さ、る、の、也、腰、病
て、あ、る、か、ら、の、書、れ、その、無、分、別、と、あ、る、こ、と、ま
就、ハ、罽、席、馬、過、河、と、い、ふ、語、が、あ、る、激、し
ハ、席、ハ、自、分、を、割、し、切、れ、ず、河、ハ、飛、び、込、ん、だ
自、か、ら、漏、る、こ、と、を、知、ら、ぬ、ま、る、無、謀、る
腰、病、が、あ、る、と、い、ふ、困、る、昔、し、動、物、學、の
開、け、る、の、時、は、席、ハ、強、い、よ、と、ま、る、と、い、ふ、れ、豊
太、閼、が、朝、鮮、征、伐、の、時、は、罽、席、(正)に、席、の、

膳、か、ち、い、と、注、又、ハ、その、虎、将、を、や、り、ア、タ、ラ
あ、り、士、を、二、三、人、犧、牲、と、し、て、席、を、捨、て、し、た、こ、と、が
あ、る、鹿、兎、時、か、ハ、此、の、席、將、の、物、語、が、あ、る、年、の
教科、書、と、な、る、と、か、ら、る、り、と、い、ふ、も、あ、る、事
ハ、席、の、皮、が、フ、ンド、シ、を、使、つ、た、と、武、人、の、勇
を、飾、う、装、飾、し、て、あ、る、が、い、ま、ハ、緋、ち、り、の、ん
の、フ、ンド、シ、の、方、が、席、の、皮、と、ま、ま、畏、る、と、い、ふ
こ、と、も、あ、る、緋、と、い、ふ、赤、色、ハ、妙、何、も、知、れ、ず、
い、ま、も、あ、る、と、云、ハ、赤、化、ハ、恐、る、心、き、し、あ、る、
露、足、が、赤、い、色、の、旗、を、ま、た、て、無、双、府、主、義
を、宣、傳、し、て、あ、る、日、本、が、其、似、と、い、ふ、も、あ、る、
が、あ、る、何、ん、が、赤、い、色、を、旗、と、し、し、と、い、ふ、か

かえりか支那の赤土とか赤保りとかいふ語
がある、その赤といふ字の何れも無い、よとす
の義がある、即ち赤土の赤も木七生えまの
赤と赤保りが赤保りの丸をいふ、インドに
も赤といふ赤保りがある、赤の赤といふ、
見ると露土の赤といふ、七皆無を赤とい
ふ、よとす解、得る、無政府無産階
級がある、志といふ之を實地に試み、甘くむの
ぬか、今の逆戻りをしてしめる、おうし、
例がある、ある、病院が赤化を試み、院者を
放逐して、使が、院者とすうて見れば、診察
が出来ない、為め、病院の患者は一人七未

る、いのち、忽ち、試飲する、こと、さうだ、黄金世
界の、さうけん、行の、さう、無政府無産階級
の、さう、行の、さう、知んた、こと、さう、
さう、さう、日本、さう、真似る、こと、さう、の、一、笑
す、値ひする、資本家、さう、とん、と、従業員、を
虐げ、さう、志、さう、か、母、赤化、主義、を、人、を、操
縦、する、こと、さう、六、人、を、虐げ、さう、の、さう、こと
を、し、さう、知、さう、さう、さう、労働の本義を、さう、ん、
働、き、さ、さう、人、の、做、を、我、物、と、さう、と、試、さう、
さう、い、さう、ん、こと、無、分別、の、商、の、為、さう、不
せ、さう、諸、君、之、れ、を、敬、を、戒、せ、よ

○毎年十二月三十一日と以て一年の算を切ると世界考の
習俗心能う此時に廣集湊合し、無割紛乱を極
あらんとす。此の二區畫一徑界ありし心、恐らく何事
七教心能を得ず、すべし。翌年、得日紙し、拾修の
無かるを憂し、人々の強動定に大憂るに在り、以年
ハ尤も之義ある大切の大誌を、其著に合此の情儀
を収め併せを改革を為行けり、四年に亘り大
畏度候に先づ此書を先づ、萬代の
也償印しりりり、三十四日、此の書は家計の未拂
定七法酒のしきりり、定也四年間の日本購目録
七冊完結し、日誌七一年令完了し、日問瑣録と
監四巻より隨筆七九冊完結し、一年間義理也

○交誼の贈答も終り、除夜杯も奉くる時、復肩流
石に軽きを乞、快書し、但比内子病む日を延々
快方に向ひ、未比床を撤する能はず、嗣子婦
を要ふことを切し、此より未年、徳候す
目じち奥りしと遠域とす、再入

○新年に熱海に行くを例とす、今年内子の病
床ありと、昔今此の如き事、湯説を為す也、要あり
り免常例を破り、某且家、在りつて、備さず、無脚
を感す、一日ハ、沓神宮を拜し、祈りを請す、神
宮成り、此二年を延ぶ、親しく祈す、初め也
神荒、地區、雄大、都門、何れ大靈地のある
の況、大帝の偉勳とせ、外人の驚歎する、不

此の経巻にぬ流以後の尤々大なるものなりと云く後
廿二條のつへく、余の望むに神威と云く境の風趣に
感し、二日市況をえんと欲し、所由日を橋本
の舞臺地と云く本不の在押上迄の場末の地を
む列し、平生藝者の家、麻葉うしと場末の地を
舞臺をの見る、才三の七児女をけし、買物如き出
けし、歌ふ、よあを嬉むをす、児女をホクく、よあを
と都下三日間、飲食をえ多く、成りて、飲食に不使
去し、二日、中央停車場の倉を、入るを由義を
く、えん、家禮と為の如く、一七改らるる、お侍
の侍ひ、おん、少年、笑答の特、や、上、あ
追、減、本年之、絶對、あり、**忘礼**●漸や、廢

その無用の藝を、より、つ、い、ま、若、こ、ぶ、へ、き、も、幼、く、て、い、
舞、首、七、息、子、を、こ、よ、と、う、う、う、う、宮、う、近、年、の、習、俗、
に、従、ひ、表、く、出、て、お、ぶ、を、可、と、ま、家、に、在、る、い、思、て、は、う、
○新年、閑、を、食、り、親、族、具、つ、を、感、し、つ、る、日、本、人、に、裁、
せ、つ、見、給、推、福、侍、と、す、湖、南、る、侍、の、き、推、福、の、高、
節、と、説、く、カ、七、洋、め、う、**若、物、の、買、如、め、備、と、す、得、**
つ、白、井、走、た、り、の、植、物、妖、異、考、ら、う、此、考、六、本、
部、部、類、に、無、く、可、く、**棘、木、も、し、寄、せ、の、ん、な、好、む、**
ハ、日、本、隨、筆、考、引、ら、う、**此、書、二、百、中、段、の、隨、筆、**
中、の、由、実、に、親、と、考、引、を、必、り、な、る、よ、の、若、考、と、大、
田、考、三、中、也、自、家、の、賦、心、を、出、す、ら、う、人、を、登、す、ら、
こ、と、多、し、加、賀、四、年、渡、ら、年、始、の、配、り、物、ら、し、

高家歳上二冊と定めてあることを天和二年の版
を複製し、そのうち各種高家集を狂句、歌、文
のよも也、本年に賀状の冠冕とすべし

○一月六日熱海と遊遊を記す所のこころ、其花
すきり好ゆ、来し遊遊支那の伊東に往か
んとつゝの心動き、多岐急に自動車に
あそび、伊東中におも、海濱の山を流し
行く、遠眺、庄曲の山脚、自動車、花
思あり、無事一時、時方、暖く、遊、つゝ、熱
海、まゝ、四十年、方二十、数年、往復、する、伊
東、遊、遊、こころ、好ゆ、也、其、心、動、き、記、す、所、に、
あり、唯、此、一、坑、改、を、感、ず、記、と、左、に、記、す、也

○伊東港の趣味の地、いさゝか、山、の、風、流、七、熱、海、と、し、
方、の、よ、る、港、本、位、が、実、用、地、と、云、ふ、こ、ろ、に、宣、う、特、色、
が、あ、る、地、が、平、坦、の、地、域、が、廣、く、町、幅、も、廣、う、の、精、庄、
といふ、地、が、隣、極、し、て、将、来、別、荘、在、在、を、云、ふ、こ、ろ、に、
區、も、甚、に、廣、う、い、併、し、山、の、取、り、こ、り、け、し、言、ひ、立、つ、
こ、の、か、あ、じ、や、う、の、所、謂、の、凡、山、廣、う、の、湯、目、と、も、あ、る、
く、あ、き、と、い、ふ、思、ひ、が、あ、る、唯、此、一、つ、趣、味、と、感、じ、
市、街、と、構、造、し、て、あ、る、一、帯、の、河、海、の、松、川、と、い、
あ、る、川、幅、が、廣、う、く、河、中、の、水、が、清、潔、で、熱、海、の、
川、の、こ、ろ、に、唐、笠、が、あ、る、と、い、ふ、川、の、あ、ら、わ、い、な、
か、あ、る、を、執、を、海、へ、さ、り、川、が、海、に、吐、き、出、す、水、に、
改、善、大、量、の、水、が、あ、る、こ、ろ、に、所、謂、の、子、山、

海嘯に沈むるんじあさうか其形無事である。此河
のやしく舟上、景徳の地がある。夫村若杉村と
して天を摩りこい神社をたゝる。多ん無
音神社の、そのまぐい岸の又音無しの流んとい渡
流が流る。市人のみりか、此の流の松川の一部
である。何れも無音の花があるかといふに、此神社の神
事、深慮に行はるといふか、ま神子執り中
河流の流流の流るが、申に入らぬといふから
神社まむ無音の花があるかた、此神社、何を祀
つてゐるかといふが、こゝは、あま神子と、就ての流流
かある。全体此の神社附、村木か多く、白晝七夜
暗い所であるが、神事を奉行する時、燈火を消し

冬集の男女、神酒を供する時、日暮暗である
から互ひに隣席の男女の尻を搦み、えを合圖
る無言の杯を廻すことゝする。是れ、えんが為
め若い男女の情交を媒ますることもある。淫風を
幫助し、強しくまるといふこともある。このいふ
が、全体尻搦の風習、古の性慾の崇拜の遺
習であるから、えんが男女の情交を幫助するとい
ふも不思議でない。一概、風紀の為め忌むべ
きものである。此の風習を、程古くから行ひん
てゐるといふ、此に傳る歴史、向日、ま
は源頼朝が伊豆流亡中、伊東祐親を初
ひ来り、端うゝ其の息女八重姫と恋、おち、一

子を奉くまふあつた、その志に後ら比の事此祠内
にあるといふから、多分合時守の尻橋かその橋
渡しと一比の事かあるか、或は此祠に八重姫を
祀つてゐる事もあつてゐる、その真偽はよくは
究らぬ、南北の度類せる神社、一ローマンスを傳へる
のも伊予切つとの意味ある事、實に、熱海の豊
一茶屋、較べると途々の高専に位する、曾て
臨村抱月が早稲田の教授であつた時、此地に未
だ此等のローマンスを聴き、大いに感服するを催し
頼朝の重姫の北の坊を、御を、古いて見よう
と言ふ比のことがある、然るに終に書かす仕度
が、あの比校比が、寧ろ躬行實踐の、文藝協会の

と無言神社に擬し、松井徳庵の尻を橋母とて
彼に如きローマンスを演じた、そのおき、本は伊豆
の北の出家の境に在り、偶々、道邊の
北境に此の事を傳へ、一笑且つ一歎した、伊予におも
いらく感ずる、此の事あるのみ、他の皆、語るは是
ら也

○道邊方：富子、一又、道邊酒問、鈴木あつたといふ
ものを、おき、酒席に傳へ、熱海の木の宮の中元の祭
礼に古来唄ひ且つ舞の歌、余の爲め、示
する、唄の十数あり、おのつから連続し、語る、古雅
のもの、その節、ハ極め、おのつから、其の
、執ち、踊り、七、その復、其の、之んを、おのつ

こと 延久バ多分後に傳へるまじといふ、現に今地
 人の外に此の歌を心をなするものありしは、此の
 人の家、此歌の家元をいふべく、あまのの父たる
 上手りてあまのの父も亦よくすといふ、歌の鐘を
 代の凡趣をいふること上品のまじり、庶民の
 踊りの又あるを以てあまのの父令時代庶民
 神社を修るは各地に同じ、以てうたひたる歌を
 遙か執海のペーセントを東京に、試演の時此の
 鈴木を車ちて遠く来り、流儀を修るは、練習
 し、はるか遠くゆき、手のこみたる踊りと、特種の節
 目をも覚え、いづくも、骨を折り、はるかに、余酒次、
 木の清めて任かせ、絶調しの二字を考き、世に、

○道邊と執海同岸、牧葉や、樂徒屋、今もひひ
 葉を揮ふ、道邊、仄興、左の如く書し、はるか余の氣
 二高ひ、擡て家と、齋とす

己んすか、高古、風る干葉子、諸鑑誌
 二者煎し、茶やく、ザ、藝評

こん防代志の、四ツの娘ひも、奉けたる、よめりす
 一七四名に、限り、多、騎る、念書、（諸誌）を、さる
 ○余、哲の、帯の、大地、雲、地、念、画、依、と、名、道、の、雲
 尖の、際、海、し、る、和、歌、を、書、あ、ん、こ、と、も、古、と、い
 ち、道、邊、皆、忘、ん、ら、う、と、い、~~は~~、記、懐、を、呼、ひ、お、こ、す
 ル、ま、じ、り、を、あ、り、し、~~は~~、為、者、を、早、大、に、考、考、好、す、と、~~い~~
 の、歌、の、又、三、首、押、毫、も、す、

宿火災のあつた巻を早大田の彼に寄贈す
ころたれあつし浄裸り悔なき時にまうけり
借う着看をぬうる

南まゝに此ころのころもぬきをこぼす
まことのわれをせまへかりけん
只心一重とすしころも歌のひたり乃
ちとをてしおあめり

○市中に数葉例の印判物古々桐流方に三葉の紙
頭余が去年贈りたる家名私印百数十顆を
拵し皆画版半切二枚を二枚の額に仕立て掲げ
あるを見よ此印美は此年 稀玉複製の陣列
今に余の家名印を出し給うとき必りなる甲斐

よまらふまゝかありさう熱海にまゝに家刺家子
こころ印判師の看版とすおまもまの也と心ひそか
に天小松林桂月の画し山み松其形をこころる
と愛し此家と購ふ

○道邊の書とあり河原首と称す毎夜此面を
室の一隅に余が昨年贈りたる陶土花也此の陶面を
掛く、余その面の何れを解せしむ道邊に河原首
め之後境の面を知り得り、此境の氣張
り情懐の感あり、案するに能面の多くは陰形
を寓す、而して能衣裳の紋物華艶なりと其其の
色彩におのづから沈黙の路あり、必り見る寺境
り此原に宗教の色彩を存する不以歎

○別の沙面に柳と架上の山刊書と抽き取りを
 讀む、おもしろく漢賦の如く蒙柳雨か春陽を
 山陰の如く、^{河柳}歌を夜に柳とて、歌を夜に讀む
 この柳をありありと研究し、学問の如く、柳雨の如く、^{河柳}太
 印の友人をへて、川柳を研究し、此著あり、^{河柳}道遠
 の序言者あり、柳雨の此編者と似す、極めを真面
 目の人といふ、ゆゑ後一本と贈りて更を讀まんとす

○道遠と柳雨を讀む、道遠は、^{河柳}佛玉の如く、
 柳雨に徴らひ、^{河柳}この流のすゝを、手帳を出して
 六七首示す、若者、レチ、カン、ブ、ラン、ク、^{河柳}

Le ciel noir. 空、黒く
 des nuy rouges, 舞、赤く
 et la neige. そし、白雪

An Piano C♯7、ハ
 quatre mains, 四ツの手
 un seul cœur, 一ツの心

Soir calme 平静 立、川、海、柳、街
 la mer houleuse 一、た、乳、泡、の、鏡
 Apporte un bruit de cloches forme

Dans la nuit noire,

Un étalon et son palfrey

Se y'a donc du liam ?

其里不夜

一星と其反射

ぢやそこはながあるんか

Cent Harpae

By René From blanc

1924

○早稲の「漢割圖書録」を讀く。この漢余の報に之
 らを指し、この論道は道の終点と余の主張するところ。道
 道の円感とる。いふ言ふ、道道、之れ之れ人
 行ある、就き、熱河、流在中、執心と表がく、説を海
 ぶ才一、最も必要とる。所、列不る。圖書の録の
 有、麻と、たまるとも、所、列所、指投を、要、大、引、
 号、凡、この、自、合、い、さ、道、撰、集、十二冊、發行、し、道、生、
 ず、の、印、稅、全、部、と、そ、の、找、に、寄、附、す、い、さ、い、つ、て、所、
 列、不、連、梁、の、次、資、又、充、れ、し、とい、ふ、才、二、回、者、級、を、
 中、一、人、清、割、圖書、に、通、す、る、書、の、い、ふ、の、を、國、書、に、
 し、是、に、就、い、は、る、中、の、い、ふ、の、國、者、級、は、是、に、
 對、し、給、料、を、拂、へ、可、き、才、三、漢、割、圖書、

として必由を要するもの代漢割の造書物成り知分
至、いまりを存し居るものあり、そのを複製するに必要
あるもの多しを要する、才一着手と要する、この
より但し此費用を弁する、その力及ばず、この複製
の支出に待たず、中四漢割固有の材料を備
のより、今後蒐集を要するもの甚多けん、
才三のよその複製に要するもの、此の方面の意
集、自分、他、時、之、に、任し、費用、亦、自、ら、弁、す、べ
し、と、尚、ほ、遠、慮、を、要、す、る、事、な、ら、ば、余、は、賛、成、を、表、し
宿、願、を、思、ふ、所、な、ら、ば、所、望、に、即、ち、建、つ、る、を
可、き、其、の、建、築、費、は、三、萬、圓、七、千、圓、出、来、ぬ、べ、し、と、
造、の、換、集、印、税、を、何、と、す、る、や、を、知、ら、ざ、ん、と、十二冊の

多敷りん、二番、五、千、圓、位、の、印、税、を、徴、し、得、ん、と、す、る、(七)
等、物、ら、も、あ、の、の、補、助、を、与、ふ、は、出、来、難、き、と、す、る、と、
長、巻、の、複製、に、移、る、事、を、存、心、と、す、る、と、
あ、る、と、要、す、る、と、す、る、事、を、可、と、す、ん、と、す、る、と、
僅、の、あり、る、と、複製、を、得、し、得、ぬ、と、す、る、と、
る、ん、と、す、る、と、す、る、と、す、る、と、す、る、と、
○遠、慮、と、す、る、事、を、余、は、猶、ほ、流、し、と、す、る、
中、の、新、年、三、日、囚、人、の、漢、割、を、見、る、事、を、流、し、
造、る、事、を、見、る、事、を、見、る、事、を、見、る、事、を、
日、に、於、て、七、日、止、し、得、ず、林、内、の、漢、割、に、
の、表現、を、し、る、事、を、余、は、猶、ほ、流、し、と、す、る、
漢、割、の、こと、を、知、り、亦、り、材料、を、販、買、し、る、

一七号の甲乙、此の二冊は因就の侯爵の親筆に就てハ世々
々々始のり少くも知るべしと、道遠真面目に曰く
其の終りと、序に在りたる早稲田文吾の記を本
可久雄を顧みても曰く、此因就中流割海小葉
記一七早稲田文吾の掲載すべしと
○今作ハ一七の端書義にみまはる、始の因を道
一其の詞者二曰く、愛身飼の始、不注意の爲
め能げ去る、始曰く、敬始(サキキエ)余曰く
敬注(サキキエ)と、道遠一讀也噴飯す
○道遠早稲田文吾の爲めに志きたる稿を修む、何か
とるんハ、裁判所、証人として見ん、脚本の鑑定
をす、其の爲の書類也、今日道遠、其の稿を、証
人として見ん、脚本の鑑定をす、其の爲の書類也、今日道遠、其の稿を、証

人として出延、其の前後七回、二六回、其の如く
裁判所、一回の横濱始書、由り、其の都方鑑定
書を必り、其の稿を、手元に見す、今、其の自らの
撰集する、其の稿を、取つて見ん、其の流
ニ、其の曲を悉く、其の稿を、他の文吾の稿、其の草
書き、其の稿を、其の稿を、其の稿を、余ハ、其の
其の味を感じ、其の心、其の稿を、其の稿を、其の
ハ、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の
と、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の
別を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の
の、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の
也、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の稿を、其の

わが國の演劇並に劇畫に就いて (要領)

坪内雄藏述

本稿は博士の親しく執筆せられたるものにして過般開催の會員總會の席上來會者に配布せるものなり(編者識)

○劇を有せざる民族はなく、劇史を有せざる文化國はあらず——されどわが劇の如きはなく、わが劇史の如きはなし——全く独自の、變體的、無類

○わが劇に三種あり——能と操りとカブキ——就中カブキは無類の劇

○わが劇史の古今獨歩たる所以は此三種の劇の進化聯絡を詳敘するに及んで初めて明晰——されど今は其暇あらず——只カブキのみに就いて語らん

○同じく無類と稱するも能と操りは其體制も歴史も比較的單純——カブキは餘りに複雑、餘りに龐大、餘りに變體的

○其然る所以の第一は、劇としての其内容(本來性)形式(演出様式及び手法)が全く混亂たる故也——人間の劇的本能の産出し得る劇的要素を其三百年の進化中に大抵取入れざる故也——西洋にては、國土、時代、民族を異にせる列國が各自分擔して二千數百年間に漸次形成せるもの——即ち音樂劇、舞踊劇、偶人劇(アヤツリ)、象徴劇、科白劇、寫實劇、史劇、社會劇、問題劇等

○實際カブキは其内容の複雑、龐大、其形式の變體的なる點に於て世界の古今に獨歩するもの——邦人すら若き人々、局外者は其本體を捕捉し得ず——況んや外國人をや

○然る所以の第二は、其進化變遷の三百年間に著大なりし爲也——少くとも七大變——第一は胚胎期——

——文祿、慶長、寛永、正保——第二は創始期——承應、明暦、元祿、寶永、正徳——第三は成熟期——享保、寶曆初め——第四隆盛期——寶曆、明和、安永——第五極盛期——天明、寛政、享和——第六爛熟期——文化、文政、天保、弘化——第七廢頹期、變質期——嘉永、安政、明治、大正

○現在のカブキは不純——極盛期のとは別種——大震災後の東京が寛政度の又は其前後の江戸と同じからざると一般

○カブキの複雑性はそれのみならず——特にカブキ國史ともいふべき連綿たる歴史を有しをりて舞臺藝術としての藝系統、營業機關としての劇場制度が今尙ほと昔のまゝに繼續せられざる點を無類の異色とす

○外國には政變、社會變頻繁激甚——百數十年間の具體的劇史を傳へ得たるさへ多からず——カブキは寧ろ蕪雜未整理の文獻の夥しきに悩む

○カブキは三百年の功勞を經たる礎也——舞臺藝術のスフィンクス也

○此複雑の進化を單なる史筆にて敘説し得て餘蘊なからしむるは容易ならず——たとひ成功すとも其書は必ずや浩漭——尋常一般の需要には適せじ

○欲しきは一般用の簡にして要を得たる鳥瞰圖式の案内書——手輕に且つ具體的にカブキの性質を、様式を、其推移、變遷を味解せしむべき方便はなき乎

○幸ひにも遠くは慶長頃より風俗畫の發達せるあり——平民的時世粧の如實の描寫始まれり——彦根屏風——尾張侯爵家のカブキ草子——村井家の風俗屏風など——狩野派、岩佐派

○寛永以後は菱川派を首魁として浮世繪の勃興——主題は劇(梨園風俗)と狹斜風俗——延寶以後は版畫進歩——色摺の發達するに及びてカブキの歴史を畫證し得べきほどに史料増加

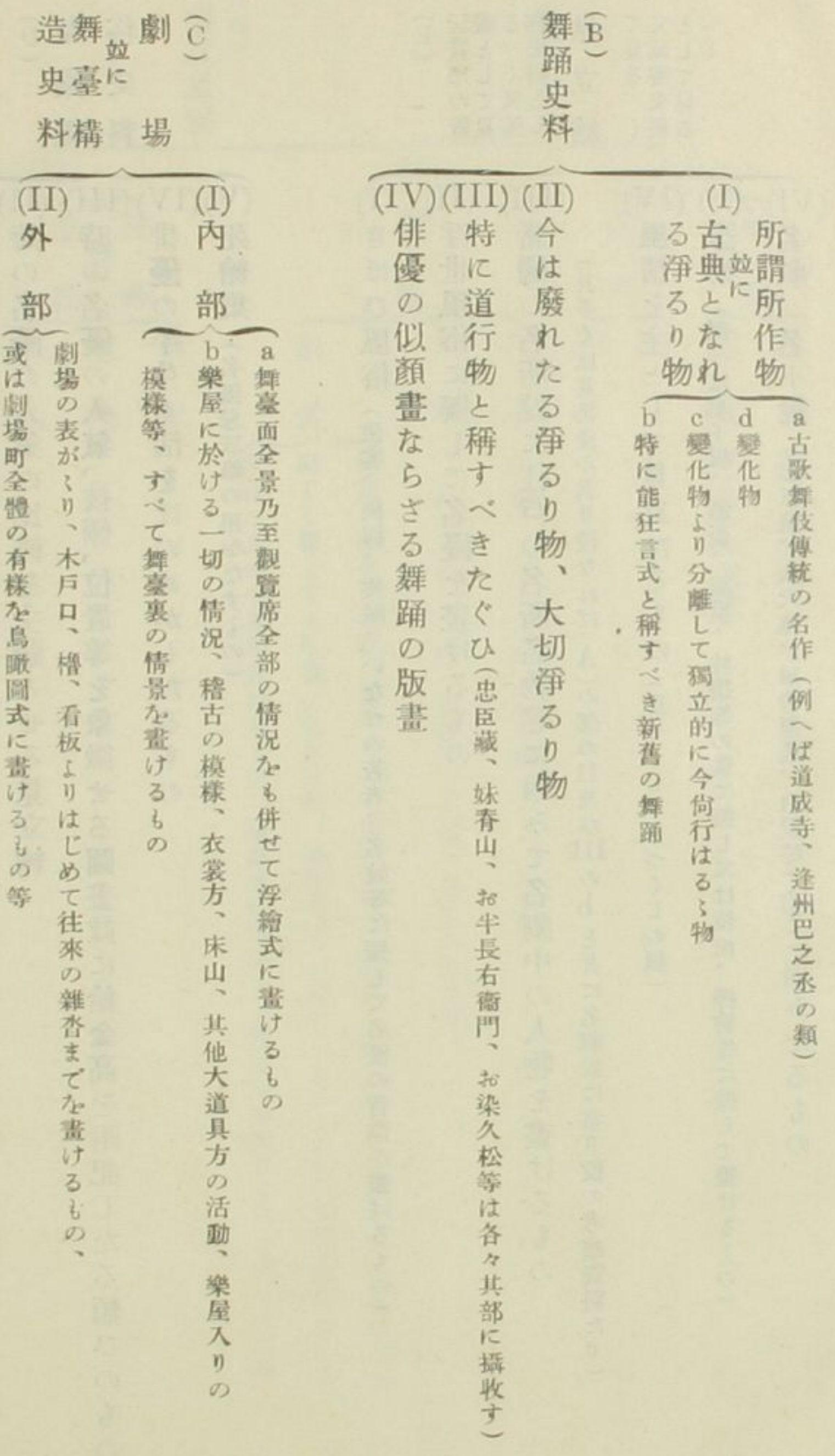
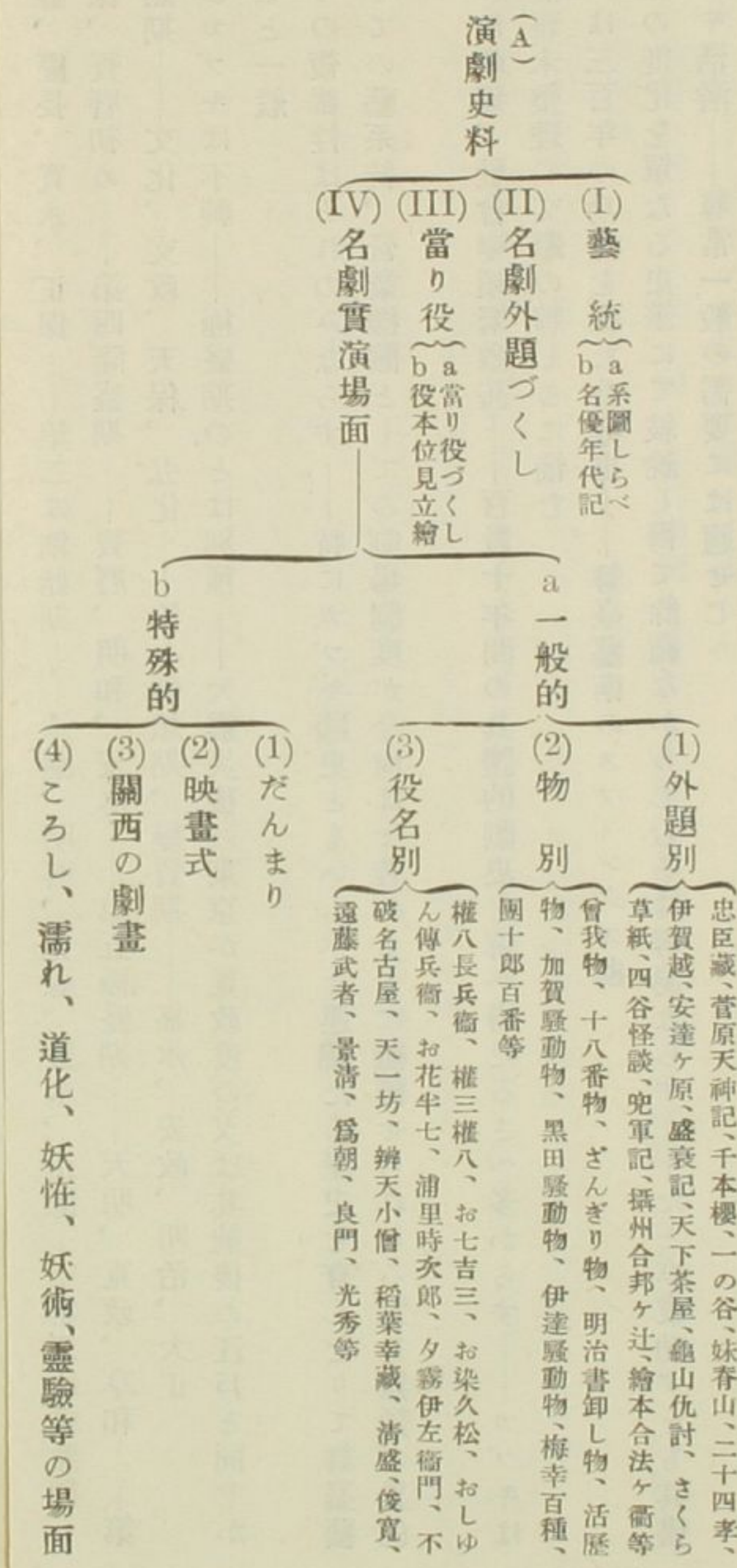
○色摺もいろ／＼なれど、今は主として芝居錦畫の事のみを語らんとす

○芝居錦畫は天明、寛政以後盛んになれり——明治三十六年ころまで連綿繼續——故に之を系統立てて分類し、年代的に配合すればカブキの變遷はほと之を畫證するに足る

○若し之に前記狩野派、岩佐派、菱川派の肉筆畫并に色摺版畫の初期に屬する丹繪、漆繪のたぐひを加ふれば、材料は頗る豊富——三百年間の劇史は、目の直覺のみによりてもほと知るを得べし

○以下は別紙第一、第二の劇畫の圖表に譲りて略す (第一圖表を省略し第二圖表のみを左に掲ぐ)

芝居錦繪



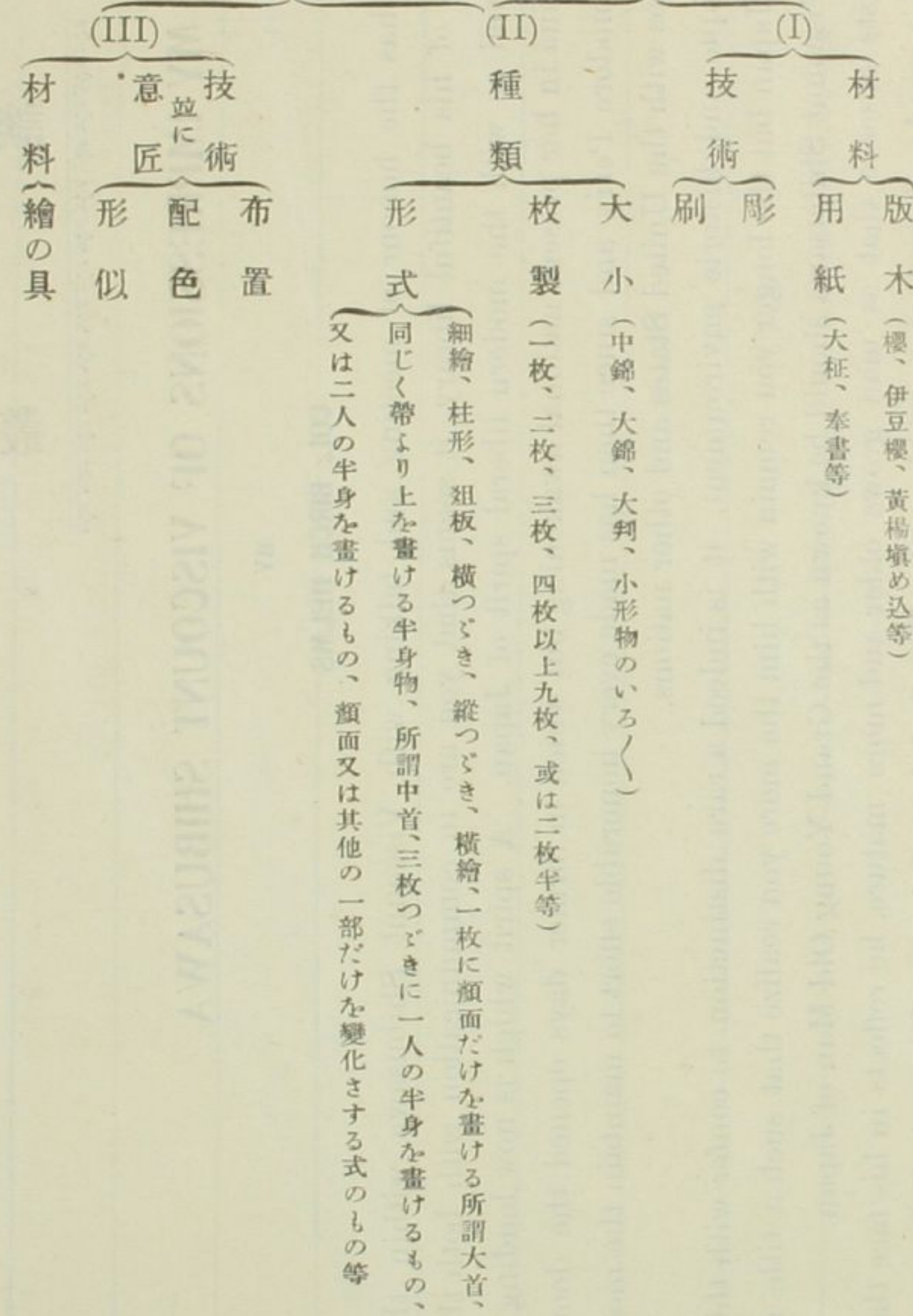
梨園風
史料

- (I) 年中行事 (口上、披露、樂屋の祝ひ、禮廻り、乗込、出發、下り上りの應接等)
- (II) 時の名優の人氣の比較を主題とする見立繪
- (III) 時の名優の人氣、技倆、位置等を象徴せる圖畫竝に給金高を附記したる類ひのもの
- (IV) 俳優の平生々活をほのめかしたるもの
- (V) 死繪集 (名優忌辰録の用をなすもの)

見立繪
玩賞用の版
畫として見
るべく又演
劇史料とし
て見るべく
又風俗史料
として見る
べし

- (I) きほひ風俗 (侠客、俠婦、俠賊、いなせの若者、名妓等に擬して名優の肖像を畫けるもの)
- (II) 浮世風俗に擬して名優を畫けるもの
- (III) 諸國の名所竝に江戸の名所名物等に因みて名劇中の人物を畫けるもの
(其多くは其俳優の當り役なれば(A)の部のII及びIIIのbと共に名劇竝に當り役の考察資料たり)
- (IV) 風情を主として見立たるもの (闇づくし、月づくしの類)
- (V) 器物 (例へば羽子板、酒盃、團扇、柱掛等の畫に擬し又は鏡面、押繪等に擬して畫けるもの)
- (VI) 名劇、名小説 (忠臣蔵、八犬傳、田舎源氏、白鷺等) 等に因みたるもの

版式史料 (F)
畫式史料 (G)



状、余、金書の如きもの、録を書に添く原書も
其に附して旋徳に載すべし、始審判所の
署あるお前のことととも六回しく収めそのまゝと
て是迄、山何れもと余の勧めに従ふ

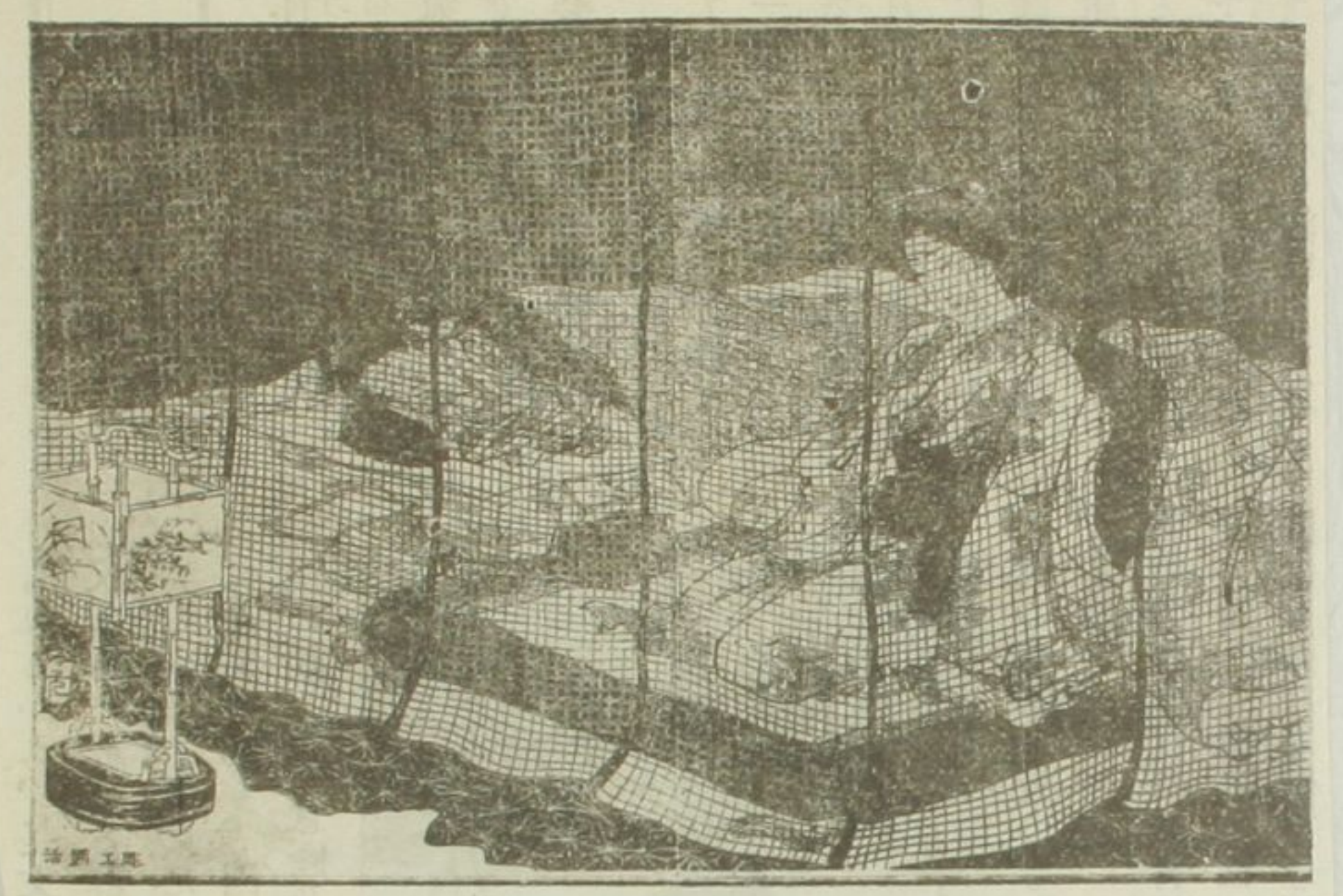
○是迄、笑つて思ふ、此頃、某旋徳に、明次初年の文
字に、就しての地又とを、余が、ちる、字、定、時代、に
ちき、或る、及、存、し、世、て、出、し、る、ま、ま、と、自、身、の
名、を、出、さ、す、楊、顯、三、の、名、を、以、つ、て、し、る、ま、ま、と、
顯、三、ハ、君、也、約、こ、こ、と、楊、槐、か、り、の、兄、も、早、大、品
本、の、秘、者、と、し、楊、の、父、も、秘、者、と、し、今、の、人、を、見、を、秘、者
す、こ、と、と、せ、ず、真、に、秘、り、の、名、と、判、し、坪、内、の、遺、一
名、楊、顯、三、と、明、ら、ま、ち、き、載、せ、あ、る、滑、秋、方、七、を

しと余、カ、考、ふる、一、家、を、も、ら、す、種、々、の、定、時、代、の、説
の、序、に、あ、り、て、世、の、一、十、日、旋、徳、を、以、し、て、示、さ、す、
余、の、家、子、時、と、あ、り、こ、こ、に、あ、る、考、お、往、來、し、と
署、し、し、る、固、也、改、味、旋、徳、の、一、月、難、か、り、此、由、に
於、人、山、田、美、の、如、め、も、遺、に、入、ら、す、時、に、
記、す、り、あ、り、あ、り、的、の、遺、の、首、像、す、と、挿、入、し、る、
讀、み、も、七、行、け、は、死、う、日、高、め、代、の、遺、也、其、の、
儘、り、あ、り、遺、の、考、き、う、は、自、合、を、背、唐、の、洋、肢
を、着、け、し、る、こ、と、と、あ、り、こ、こ、に、背、唐、と、あ、り、誤
り、と、非、ず、余、も、あ、り、的、に、ド、レ、が、元、一、ニ、ン、ジ、カ、セ
ビ、ロ、カ、解、志、の、考、の、あ、り、る、を、考、を、考、あ、り、こ、こ、と
か、い、し、一、笑、す、美、の、の、記、す、り、珠、々、し、け、ん、は、こ、こ、に、あ、り、

めりまゝ、北の龍徳もさあ邊の妹將統の爲とよ
 載せりまゝ、さあ又中よ北のや統中の揮後を●カウト
 として入るまゝ、さあ圓の女に、まぬふ存すこと
 ○前掲印刷物、わう圓演劇並に劇画の一篇の
 邊邊が龍門今の需にむして講演し、筆記
 まゝ、こんとこゝろ存す所以、北の劇画の分統
 二平福田圓を領不爲の役者後をさあ邊救正記
 の時定め、今このまゝし、余の利本を得んことを
 於し、おさる、丹お柄佛し、北龍徳をばらん、ハ切り
 放して、こゝろ、ぬめおゝ

○北海、北のんとして中央停某城のまゝ、底に手あり、次第
 一二の山利をを踏のま車や、消代の具をさう、中へ楚人

十二行



冠の雅業あり、白馬城と署
 才往復の車中、大目半後
 又果、さ、北の、の次初年
 東京昌ま橋所し、起り
 たる復、儲定、ま、彈、ま、北
 こと、い、當り、ま、大、ぬ、を、再、ま、せ
 ー、こと、あり、北、記、ま、い、南、時
 さ、あ、ゆ、と、長、今、い、七、時、人、の、今、
 あり、あり、し、の、後、り、ま、る、定、後、
 と、あり、二、人、の、見、才、七、式、の、復
 記、ま、て、最、後、の、復、儲、ま、る、本
 が、存、ま、る

明治文壇叢話(二) 其五

明治文壇叢話(二)

春のや朧大人 長谷川辰之助氏 美妙齋主人記

春のや朧大人(坪内雄藏氏)は安政六年美濃國太田



春のや朧大人 長谷川辰之助氏

驛代官所に生る。其父は尾張藩の士族なり。十歳の時父と共に名古屋の近在に移る。明治七年同所なる愛知縣外國語學校に入り英語を學ぶ。同九年東京開成學校に入り後に東京大學に轉ず。同十六年卒業して學位を得。同年東京專門學校に聘せられ今尙かしこに講師たり。此年より同十九年迄三年間は教授と著作との間に晝夜を分てり。シェークスピアの「シーザル」の翻譯は其最初の筆也。「小説神髓」といふ論文も同時の著述なり(出版は十八年

也)其他リットン氏の「リエンジー」の翻譯(不結局)、小説「書生かたぎ」寓意談「京わらべ」、翻譯「マダム、ローラン傳」、「未來の夢」といふ内地雜居に關する小説(不結局)、「妹春かすみ」といふ自由結婚と關涉結婚に關する小説等相續て出づ此頃また「今日新聞」「女學叢誌」「政學講義會」「中央學術雜誌」「讀賣新聞」等に關係し又專門學校の外に私立學校二ヶ所を教ふ。十九年の夏妻を娶る。同二十一年「政學講義會」及び「讀賣新聞」の外に暫く「繪入朝野新聞」「浪花新聞」「新潟新聞」「學藝雜誌」等に關係す。又春のやの名義にて「浮雲」といふ小説を出す。但し之は二葉亭氏の作にして自著に非ず。此年の間從前の諸學校の外に成立學舎といふ私立英學校を

教ふ又「讀賣新聞」の小説を擔當す。同廿二年「讀賣新聞」を退き専ら教授に従事す。同年末「國民之友」の爲に「細君」といふ端物を綴る爾來著作無し。

坪内雄藏氏がはじめて世に現れたのは私が書生で潜つて居る頃でした。その初陣は該撒奇談、明治十九年の出版、それを葦原生といふ人が讀賣新聞に評して「日本始めて譯書あり」と云つて一も二も無く褒めた、その文に接して噓と私も駭きました。しかし半信半疑、その内間も無く寄書で坪内氏の答辭も有つた、その文を見れば馬琴から出た和文體、中々の品のよき、まづ陸若と爲りました。

をれから書生氣質、小説神髓、概世士傳、及び妹と春かすみなどを續けて見て感不感相半しました。實に是は思ひ切つて今打ち明けて云ふのです。

はじめに私が坪内雄藏氏に面會したのはやはり依田氏と同じ日で、その場處も同じ三緣亭でした。氏は定刻よりすこし後れて來て、私が朝比奈知泉氏とはなして居た時でした。

不圖聞けば絨氈を踏む軽い靴音、ふりかへつて見れば來會の一人でした。中身長で瘦がれた方、色は

薄白くあまり濃くない髯の迹があをく腮に残つて一昨日あたり剃つた體、めかすのが好きでも無ささうとは一目にも見えた、それが思ひ設けぬ坪内氏でした。それ迄に想像したのとは全で違ひました。

爲朝がはじめて白川御所に出た時、諸公卿が其名聲を想ひやつて大騒ぎして透かし見たといふ、その昔しの儘の私の心持ち、これが春のや氏かと屹つと眼を注いで見ました。

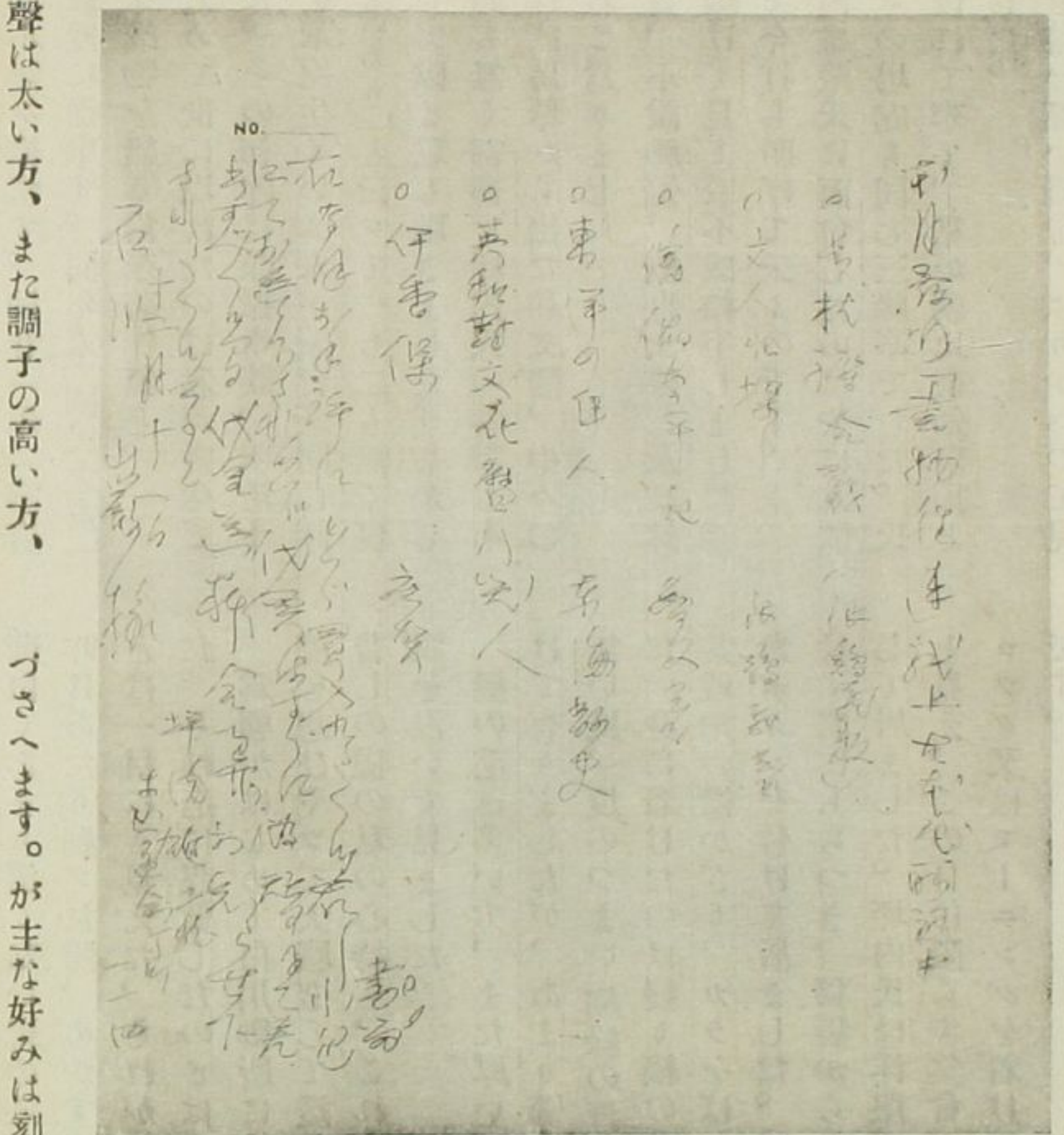
髮の毛は多い方、また厚い方、や、左へ寄せて分けて有りましたが、あまり櫛に厄介は掛けたらしく無い風、度につよい細縁の近眼鏡を掛けて居ました。身に着けたのは變り縞の薄蔭の格子の背廣、白茶琥珀の襟かざり、カラをば澤山にあらはして金の角ボタンを付けて居ました。時計の金はすこし目の付く處にちらつき、秘袋からはんけちが一寸顔を出して居ました。坪内氏は洋服では背廣を多く好む質と見え、この日に限らず集會又は外出の時にはフロック又はモーニングを着けるのは比較して少い方です。

初對面の口誼を述べて、そろ／＼四方山の話に移

れば其話しにいつも角は立たず、ほとんど喧嘩場の

あまり早く無い方、會話の間にはをり／＼滑稽がま

話になつても丸くかたれるといふ方がたれた。近眼鏡がやゝ下の方にさがつたためか、多く人をば上の方から見て、そして應答の時しきりに點頭のが癖で、相手のはなしが、言はば眼目といふ處になると「なるぞ」



最近本誌の「紙上本屋」へ御用命あり坪内博士の全文なり

る方、問答の論が僻して出ても手づよい反對も現れません。そのくせ話しはますます語り進みます。言葉の音調には名古屋言葉が猶おもかげを残してゐますが、なか／＼知れません。ほとんど東京語そのまゝです。酒は飲まなくも有りませんが、決して多くはなく煙草をばなか／＼に好んでいつも喫煙の道具はた

て微笑します。音聲は太い方、また調子の高い方、

づさへます。が主な好みは刻みの紙巻たばこに有る

と見えて、携帶の品は大抵それ、今も目につくのは鼈甲製の煙草入れです。

外見は前に言つたとほり、これからは些し細かい處に立入つて見ましやう。人との談話は甚だ愉快で而も話しが進む方、人が語ればたゞ／＼頻にうなづいて居るところは或は人の心中を窺つても居るかとも見ますが、よく／＼正せば強ちに左様でも無かつまらぬ争ひに波風を立てるのを好まぬといふ方です。ならば話しが衰へるかと言ふにまた左様でも無いとは頗る奇です。要するに、雨中の梨花、遠く見て艶、近づいて瀟洒、たゞ人に媚びる海棠の色を餘處にして却つて落ちついた處に香りをとゞめる體です。たゞいよ／＼親しんでそしていよ／＼分からなく而も兎角の批評をも下しかねるのは氏の性質です。澄む水の底は泥床、つねに重くも無くまた軽くも無い氏の態度は暗に他人をして氏を神經質の人かとも思はせます。が、思はせるだけ、その兆について尋ねられてはまた答へられなく爲ります。何が無し、心のつまらぬ、愛嬌のある人、往來で頬に小ヒッの入つた子供を見ても齒を白くあらはして笑つてそッ

と抱きあげさうな性質が。一口に言へば敵の少ない身のこなしです。

座敷のかざりはあまり氏は心を用ひぬ種類と見え、いッも際立つたところも有りません。相應の軸に九谷の大花瓶、打ち付けの物で打ち付けのま、粉飾を廢して部屋を普通にして置くのが氏の常です。あゝ是が氏の文や態度とかはる源です。(完)

長谷川辰之助氏

世は不思議なもの、何處に知り人が有るかも知れず、また何處で舊友に逢ふかも知れぬ事。こゝにたら／＼考ゆれば私が幼な馴染であつた友だちで今日名を爲して居る文學者は都合三人、長谷川辰之助、矢崎鎮四郎、尾崎徳太郎、これら諸氏です。

長谷川氏が私に於ける關係はすこぶる小説めいた事です。すなはち氏と私とは只われ／＼二人だけの交際が茲にはじまつたので無いことです。(嗣出)

○此年早稲、二三友人と浪舟、松枝に飲む、亭
の女将、紙筆を出し書も需む、余乱舞、中、筆
と走らむ、五六紙、咄、成る、研、守、言を用ひ、
書却りて、天真の如く、余、押、筆、も、うり、自
笑つて、早く、北、尋、の、書、醒、時、心、能、の、お、と、此、多
宜、尚、と、う、しか、紙、へ、お、の、余、熱、海、に、折、き、し、不
立、中、の、松、枝、女、将、余、か、家、に、長、廿、二、河、に、出、し、き
絹、張、り、の、巨、額、を、搬、入、し、来、り、白、鷹、の、四、斗、一、樽
の、若、冠、り、を、帶、り、浴、衣、の、巨、額、に、余、の、揮、
毫、を、求、ま、る、の、淋、儀、と、し、也、酒、を、貯、り、来、り、
り、余、一、笑、し、七、日、余、の、書、七、亦、價、あ、る、か、白、鷹、
の、斗、一、今、價、百、圓、と、越、り、中、出、拙、書、を、評、價、し

この田と為す女将一隻、眼ありと謂ふべしと、余、
海、を、こ、ゆ、ま、事、ある、し、未、に、揮、毫、を、果、さ、
成、る、の、日、二、三、斗、を、携、へ、て、其、の、扁、額、の、下、に
盛、宴、を、張、り、氣、を、吐、く、可、ら、う、然、ん、も、其、故、
賦、に、女、将、貯、り、下、の、潤、筆、料、に、倍、す、る、の、あ、
ら、ん、女、将、の、女、給、人、を、誘、ふ、所、あ、る、三、米、武、主
の、龍、蓋、さ、ん、の、名、偶、死、に、あ、ら、ず、好、笑、
好、笑、
○新年始りて、神田、有、居、と、同、書、を、送、り、獲、る、不、甚、
少、可、し、初、め、と、し、ハ、お、貞、納、極、ま、ん、と、も、亦、新、納、
庵、の、折、柄、凡、書、の、友、弟、す、る、の、書、の、采、と、謂、ふ、べ、し
左、に、一、二、を、採、り、
大正十一年一月十三日

羅氏古抄本書目刊

十三冊

論語鄭氏注

沙州圖經

皇占

水部式

張延綬別傳

春秋後四傳

太公家教

相火春秋

諸道山河地名要略

吾化

陰陽書

唐人進倉詩

脩文殿詩覽

羅振玉古抄本とエロタイノ改に附し校勘の叙あるもの少からず、此十三冊七冊の二冊に余假り、余も古抄本書目刊とある、唐代の新刊多し、概略送書多し、佚書とあるかとするもの現存の書に對比して古本を偽ふるもの少からず、敦煌から出たものと思はる、唐代の書を味ふ上に於て甚しき價値あり、羅の校勘稿を悉し、喜ぶべし。

一乗合はり

座敷應門是行きんは旋傳の二種とも
不謂る而時の凡そ稱多、こんと收むる
下のよあ多く我紙後の紙は：関東、卷
頭：座内の老匠石原全右衛門が紙は
：描はんは深懐中、せしこと不善魯士
必録多館：我園地と其の以漢文より
仙其も八分は未深座内の重臣列著るは
新編にありし外高ス子ルは宛座内高下
り友三印より軍兵の記文と、まておるも
答ふ等とぬめ紙後の文の史料とを
つべきこと也

一人師本三行

海島本

春面衣

一冊

出ころの林

一冊

松籟と月

一冊

為永春女のつ人の葛梅曆の流を汲む
よまう繪と猥褻するも、文言之書
春畫の詞と因じある時代、此等の
書に紙取をえんを思へ、隔世の感あ
り此等の版木其所に保存せんとするの
書肆印刷、附し、今、三十年程
七前のことより、今、稀觀の書とあり
容易に得可なり

一 漢江戸歌

一冊

橘守部の江戸漢美の長歌を自書し
るを白ぬききりし墨帖也守部を
をよきし其の自書其の刻さんある
蓬萊園日記其他一二あり而して漢
江戸歌の墨帖は流布し物も少く
余の目に觸る者これに始り也

〇近來川柳をいふくも分類して川柳より物を研究
するに在り此の寸的の世おをも研究すること
行いんてき此のを執味もあつたこととあると思ふ
とある西原柳舟の近著「川柳は江戸歌の便也」此意

味に於て此の愛後するはゆめは是の序を告いで川柳
を鑽り火ひがイヤの多し角の世おと人々と習見せ
るると叙用のを棄し此が其に喩はゆめを免る
骨を刺し肉を免る川柳の寸的ある時、鉞
の用をさし悪徳と悪業を規戒しある
時、鉞の働きを七時代世おの秘微を測り
近頃寸刻といふ科語が出来た川柳は文
ある寸的の叙す詩のあり寸的諷刺の
ある寸的諷刺のあり、俗言といふハパワと撥
筋の寸的の火の光りひがイヤのやうに多し角
的の世おと人々と習見せし、美んが川柳の
特技のある、こんな調約する人々詩の、古往今來

又といふこの圖もさうなり。

毒を覚毒を制すといひ、火を以て火を消す
といふ諺があるが、西原君の此新著の價値は
まことにさういふ點にあると評價したいとい
ふのは、君の厩火に遇かして、解毒の如き
扱ひしうひ殺さぬ後といふ怪物と、筒物と
きん籠翠のやうに捉へにくひ川柳といふ怪
物と同じ檻の中、押込めと、空もく双方を制
するの便法を供給せうんといふところがある。
ついで、私に鑑了火の光りか廿枚の多用
面を瞥見させようか、川柳の特技を言つたが

○

実際、川柳の御ゆる花雪の如く時と
し、厩籠る物もあやむ世界の有象無象が、
悉く具體的、さうして、恰もスクリーンへ映し出
されんやうに、春の動、活躍する、乾燥を尋常
の文献から、述べわらうか、或は、得んらうか

一 沙弥初めを才子を誘ふ、奥に甜うと才子の傍
亦奉ふ、濕ひ津々やう、沙弥後ろより摸り
嘆しと曰く、南無阿弥陀佛、寤ぬけは
とらふ。

一 老僧林やぶに往き、大便せんとして、誤つて
殿内を筆の上に乗せ、離佛之んを
見し合字しと云く、南無阿弥陀佛、天の
報いしや。

一 師父、夜沙弥に云、今宵素冠をすくし
沙弥云、素冠と何の事か、師曰く
唾をつけぬとまふ事、正にはいぬぬ
沙弥痛を受ふこと甚しく、声を見し

師近さま、どうもこれへん、才をの、草
解、下さうい

一 官人堂に坐す、衆人中、屁を放つともあり
官の云く、何の音か、拿へ来ふとい、僕曰
く、是んかとい、難き者也、官云く、如何んを拿
へん、僕、是、非、を、紙、を、以、て、屎、塊、を、包
み、之、ん、を、出、し、と、曰、く、正、犯、也、
唯、家、属、を、捕、へ、来、さ、し、

一 龍陽初め、婚、禮、を、し、て、殿、内、を、妻、に、寄、り
せ、けん、が、妻、摸、り、ま、し、て、訝、つ、と、曰、く、
ご、せ、り、ま、し、ぬ、と、龍、陽、又、妻、を、摸、り、ま、し、
し、て、訝、つ、と、云、く、ま、ら、ぬ、と、う、し、と、無、い、ひ、

まゐりか

一阿子に佳名を附せんとし滿家の士に嗚呼此
人賢くも子にあり、士名を撰んが金部と
余未夷いくも子死す、又一子を奉ぐ、滿
士亦銀部の名を余未、又或曰んくも子
死す、汝又一子を奉ぐ、滿士に嗚呼と曰く、金銀
ハ貴きとあるも我身につらぬと云く、
と云く、賢くも壽ある名を撰ひたす、士
曰く、此ふ先生と名づくべし、其故を問ふに
曰く、先生は名に飢て死す、凍へるも
死すぬ、と云く、

○世の坊間、四玉の古枕と詔のそ若千の因書と物
々々

一海邊狂歌合

二冊

一月廿四日録

北書上巻狂歌を収め下巻の因書と
録す、狂歌も上田秋成心く、
てす、へて三十二首、左右に、
歌仙、飯あ、う、自筆、をそのまゝに
刻せり、左楮道心、右、望、
の、我名を共に、秋成、自身、
④成、始の紙を、敷、
と、
撰ひたる、

算の時撰びたりと云々、画り
文鳳南と云々、左右各々撰あり
巻首に文鳳の漢文の序あり、
世上北の國の都の表題を
夏と云ふ布す人の唯に文鳳
南岳の画譜と云ふ心におるに
一卷の缺を記し、因り、
此書完本と云ふとす、因り、

・笑耶論

一冊

把真道人佛徹定の法二年
木派と附する不耶と對教統

十二行

著す不の夢醒真論を駁し
寫書り、徹定の破却支丹
の外にもある、こゝに極めて稀
なり

一楚辭圖注

四冊

陳洪俊、蕭雲從二家の圖あり
楚辭、其原本の支那に於て稀歟
の、そのうち邦人の其の姓名を考へ、
元々楚の、そのうち、
に於て撰版を依り、余の得たる
もの撰版あり、末巻の外、

回板趣味あり、玩賞すべし

一 公家要説

二冊

元禄の刊行多し元禄武隆と在り珠と末(し)

一 烟草二物

一冊

東山の歌心コンニヤリ本、烟草
を主題として滑稽物を弄す
烟草礼讃の一資料とすし

一 コ 新論 新撰氏述

正續 二冊

十二行

安政年間申病流行の時種々の
疫病を治するの醫書出版せる、
然るも多くは通俗のよきもの
の流方を詳悉すること少し、
書ハ西洋の研究を詳しきもの
も此部類のむの三巻に備はりたる
もの也

一 心のあいかぎ

一冊

一 即席大津画由未

一冊

前者三馬の伝墨屏風の傳後あり
在り此の心圓の傳も其の類也

紙中著るものもあやも二本共に存在する
とせよらるこふ

一 江戸砂子

六冊

此書二版あり巻数同一なりと世に多
流布するものゆゑの増補なる初編
本はま保の版なり余の復写は即
ち初版なり、加中既に續編あり
此書無る可く知

一 醫戒

著者 杉田信成 著
書年 四年

一冊

醫者の病者に對し又世に對し又同業
者に對しての戒を鄭重に教訓して

此の書は医家にあるものもあやも二本共に存在する
とせよらるこふ

私がちいさな本の『萬集』を始めたのは、今より八年前
 大正七年の二三月頃からで、三四年『萬集』についての
 目録見本が、千石百種を以て行詰つたところ、倉敷打切
 リとして癢めました。今『萬集』當時の事、多
 くい忘ん感興もあつた、然るに昨年の秋早
 稲田に新図書館が出来た時、同人の新め、
 初めて二百點程の一番小さな本、陳列を試
 したので、幾ぶんかの人の目に觸れ、多分、私
 の『萬集』コレクションに就き、先や中と申す方々
 から『萬集』の経歴、甘其他、翻閱し談話を求

めらう、事が起つて来り、それが、実、一時の戯れ
 じやつたこと、深くお話しする不ばのことあり
 ません。

私ハ公私の關係から前後十萬、近ハ書物を蒐
 集し、事があり、性来書物が好きで、今でも毎
 日書物漁りを日課のやうにしてゐます。大正七年に
 フト、此思ひのせから、小さな本を、寄七集め、この
 を始め、その、動機は二三、珍らしい、最小形の本が
 手に入つたので、聊か趣味を覚へ、病やつきが
 あつても、自分の長い習慣、毎日市中、散策
 して、目的、唯、此、歩く、歩、き、回、る
 ことが出来ません、先、小本を、搜、か、し

と歩くのを散策の目的とし、（正）既に十
萬の本を集め、（中）任歴から申、（私）大甲、（飽）飽い
れとせよ、（い）いせう、（此）此上、（個）個賣の扱ふ小鮮こ
を却つて一種の味がある、と云ふのが私の心意氣
にあり、（全）全体小形の本に取扱の煩いといふはあ
りませうから、（同）図書館であらうと云ふは、（七）七厘、（八）八厘とせよ
ませう、（個）個人の私藏も多く無い、（通）通例であらうませう
（目）目私とせよ、（コ）コナ物を寄せ集めたこと、（既）既に
りませう、併し誰れも心掛けること、（あ）あから
遣つて見る氣も起り、（中）中一、（銀）銀、（銭）銭、（貯）貯
りませう、（形）形が小さい、（の）の、（散）散策中、（得）得るに随つて懐中
袂に入れて持か、（こ）こゝろ、（か）か、（容）容れ、（あ）あ、（但）但し、（此）此類の

（正）既に十
（中）任歴から申
（私）大甲、
（飽）飽い
（い）いせう、
（此）此上、
（個）個賣の扱ふ小鮮こ
（全）全体小形の本に取扱の煩いといふはあ
（同）図書館であらうと云ふは、
（七）七厘、
（八）八厘とせよ
（個）個人の私藏も多く無い、
（通）通例であらうませう
（目）目私とせよ、
（コ）コナ物を寄せ集めたこと、
（既）既に
（あ）あから
（中）中一、
（銀）銀、
（銭）銭、
（貯）貯
（形）形が小さい、
（の）の、
（散）散策中、
（得）得るに随つて懐中
（か）か、
（容）容れ、
（あ）あ、
（但）但し、
（此）此類の

書物がどこの書店にも澤山と積んである有り、（稀）稀に
んて、（の）の、（興）興か無い、（所）所が此の小本、（あ）あ、
つて、（或）或る十数種の外、（容）容易に見當らる、（随）随つて
之んを獲る、（多）多、（少）少、（方）方を、（得）得る、（多）多、
要する所、（興）興味がある、（ん）ん、（か）か、（私）私の蒐集
を志し、（此）此、（書）書、（の）の、（名）名、（を）を、（あ）あ、
此の本の大きさを就て多少の説明を、（全）全
体小さく本といふ、（名）名、（が）が、（あ）あ、（り）り、（ま）ま、（け）け、（ん）ん、（と）と、（寸）寸
尺をハッキリ言ひ、（あ）あ、（ら）ら、（い）い、（に）に、（名）名、（を）を、（あ）あ、（り）り、（ま）ま、（ん）ん、（支）支、（那）那、
ハ巾箱本といふ、（と）と、（小）小、（さ）さ、（な）な、（本）本を意味し、（お）お、（け）け、（り）り、
けん、（可）可なり、（大）大、（き）き、（な）な、（の）の、（あ）あ、（り）り、（ま）ま、（ず）ず、（十）十、（珍）珍本、（袖）袖
珍本、（皆）皆、（互）互、（小）小、（さ）さ、（る）る、（本）本の事、（と）と、（あ）あ、（り）り、（ま）ま、（ず）ず、（け）け、（ん）ん、（と）と、（尺）尺

此制限がありまをんから、**堅三寸の本**と**堅四寸の本**
も皆寸珍本、**平本**の袖も**珍本**と云ふんせおます、**実**
ハ同一く寸珍本かち或る寸尺を起してハ例ハ堅
平本と云ふて未だ**数寸**より上りて**深山**の**深**
目、このかあります、例ハ**堅四寸**の本ハ**割金**が
くあります、**堅四寸**の本ハ**三寸**と**辨**の**愈り**多く
あります、**唯ハ平本**と云ふ**豆本**といふてあります、**此**
最小の形のものとは**意味**しおのり、**辨**も**厚**
二寸位若くは二寸以下のものありて**無けん**の**豆本**とい申し
ません、**佛**も**平本**を有るは**此**の**形**に**或る**寸尺**深**
む**唯**ん七知を通り**ポ**ケツト、**ブツ**と申せば小
形の**本**あります、**けん**も**けん**と**日本**の**袖珍本**とい

一換レの**最小**の本のとい限りせん、**最小**の本の**数**
してハ列ニ**名**あります、**ビ**ジョウウ、**ブツ**と
いふか**せん**は**一**の**乃**ラ**豆本**が**ビ**ジョウツ、**ブツ**
クハあります、**レ**ハあります

どうせふさい本を言ひますと**ある**ハ**最小**の**豆本**ハ限り
とせんハ**照**味も**あり**、**譯**は**せん**と**数量**が**甚**
た**少**く、**且**つ**玩具**に**近**いものか、**自**私ハ**定**尺
を**豆本**も**大**きく**極**の**一**ハ**乃**ラ**取**三寸**五**六分
幅**二**寸**五**六分**〇**の**一**ハ**英**集の**標**尺と一ハ**実**物
ニ**就**て申すと**館**柳**澤**の**林**園**月**令**や**和**漢**各
書の**数**の**如**きハ**凡**そ**此**の**尺**に**當**ります、**此**の**大**
きさが**一**番**格**好が**よい**と思ひますと思ふてあります

勿論こんなものもあるが、私に喜ぶものもあ
ります。けんも、さるの餘り澤山あるが、私の英
集、これ千五の種の内で、定尺、さるも千さい、さるの
二百種もあるが、早編の回数、版計り、
一と見れば、此部類もあるが、版本計り、
二種、さるもあるが、書畫帖の類、さるも入るが、
ト此教、さるも、佐、さるも、中、さるも、浮世繪
さるも、豆帳、さるも、作つた、さるも、交つて、おもしろ
北等、豆本の、さるも、の、さるも、の、私の、定尺、
①は、さるも、小本の、割合、に、さるも、の、さるも、
大きさい、右の、さるも、の、割、本、の、体裁、種々の、差
別がある、卷子、さるも、の、帳子、さるも、の、横張式、さるも、

ハ列蝶とドもあつた、校式、さるも、の、教、改、さるも、の、銅
版、さるも、の、流、版、さるも、の、印、さるも、の、又、寄、本、さるも、の、紙、
著、通、の、紙、の、外、薄、葉、鳥、の、子、洋、紙、と、換、く、あつた、
すが、定尺、に、相、當、さるも、の、さるも、の、採、つ、て、おもしろ
論、日本、改、び、の、朝、鮮、改、び、の、支、那、改、び、の、西、洋、改、び、の、
難、ひ、ま、せん、が、西、洋、改、び、の、さるも、の、年、が、充、分、届、き、
さるも、の、おもしろ、所、の、西、洋、本、の、偉、か、い、五、六、十、一、か
あつた、せん、亦、い、くら、形、が、小、さ、く、さるも、の、採、つ、て、おもしろ
あつた、せん、支、那、の、科、考、考、試、の、考、本、や、支、那、の、脚
本の、類、の、餘、り、の、粗、製、紙、の、さるも、の、採、つ、て、おもしろ、西
洋、紙、の、印、刷、の、粗、悪、の、本、も、さるも、の、採、つ、て、おもしろ、印、譜
の、類、の、類、の、採、つ、て、おもしろ、

叔也當初蒐集し着手した際ハ先づ百種を得ん
と心掛けれがあとから考へる事〇餘り志が不
き〇失笑を禁み得毎かつた併し百種を集む
ることか實際餘り容易ゆゑうた斯る経験
の無い人ハ或は寸紙百種をかき集めらハ朝飯前
と思ふかも知れんが實際ハそうはやすく空の
有觸れにそのどこの方店もあふが、その有觸
れもの三四十種も集め〇さへ其上とすると
十かく容も見當らん實ハ寸紙本豆本の失せ
易いもの、普る需用の無いものあるから、書
也之れを重んぜり、多くは塵芥同換て見てみるか
ら餘り注意も拂はず、特別此種の本を買ひ集む

の書店も無い、此から或軒の書店を漁つても同じ物
どころもあるが、夏つれもの多く一冊も見書も出さ
ないが、難い位がある、それから僅々百種を
集め集めると二三ヶ月も費して可なり、労を感
じ、生して百種に達した時、コンナことを考へた
いくら大都會の此種の圖書の甚だ少るいよ、
自分の力が假りにも買占めようといふこと、
言ひ聞
るが、此種の圖書の圖書の買占も左様な難事
ハ、三都に流つて極正を漁つたとし、
知
れ、このことを考へたこと、
保し
自分の此の考へ、
裏切らん、
其後、
漁つて平生号を入る、
店に入つて見ると、

ツく見當る、更々者居の即去合をゆる道を入
て見ると、爰より三種や五種ハ年々入るやうな譯心
毎日多少の収獲がある、手も空かしく帰つたこと
幾人とも無つた、多分(多分)する内は私が此種の本を
めるといふことが書肆の知る所とする、~~書肆~~書肆
注意を拂つて私をアテに日方々を捜し、買ひ集
を捜かすこととするつたのむ、いろくのものが出た未だ
大抵は自分の所持と重複するもので、書肆を失望
させることと、再々あるつたけれど、年々入つたよ
り少くも集つた、終つた何の序に京大坂へ出た
漁り、人の依頼(依頼)が、~~書肆~~書肆他を捜索させし、
追々私のこの見識、類する萬集が評判とある

て従前幾人と價の無つたもの、段々高價のもの
にうつて来た、~~書肆~~書肆が高くなることも、拍(拍)現へん出ると
か、意外の方面から、種々のものを齎(齎)らして来た、
あ、~~書肆~~書肆三月は、~~書肆~~書肆の間に三百種と達し、更々
望蜀の念が起つて五百種位の集め得る、~~書肆~~書肆
うと萬集を繼續して見ると、又張り毎日二種や
三種の手入り、終つて五百の數に達し、此時はよ
い可憐(可憐)に、~~書肆~~書肆見識(見識)に、~~書肆~~書肆存(存)しいことを、~~書肆~~書肆
考へれば、~~書肆~~書肆あか(あか)し、漁つて見ると、底知(底知)るすあるやう
にも思ふ、~~書肆~~書肆極(極)點(點)まで遣つた、此の本に就て
自然一種の研究が出来さうと、~~書肆~~書肆
千種集めたいと心うけたのが、~~書肆~~書肆
千種集めたいと心うけたのが、~~書肆~~書肆

千種集めたいと心うけたのが、~~書肆~~書肆

の事いふは、これから千に達するまで、二ヶ年七費し
るべく、骨が折れ、漸やく千に達して更らふ千五
百に達するまで、愈々困難を感じ、北河の経典
と季曲に読ると煩雜じあるから、省略
が到底、私の定尺に相當する板本だけ、千
千五百の数を得ること、出来ぬもの、
私に多く的小本を集めて、見て不満を感じ、
の、業外趣味の乏しいこと、小本の形が欲しい
もの、か、本とするて、おろいこと、あり、
此の趣味を添く、為の、す、珍の名家の書、
帖を百計り目を買ひ集め、又、小本とて、
い、詩、俳、茶、文、その他、いろいろのものを自身に

騰寫して百種近く作り、これが自寫本の
み、の興が、あつても、知らぬ、
も、の、つ、れ、の、あ、つ、ま、す、又、印、友、の、珍、藏、の、印、
せ、小、冊、と、捺、し、て、
、五、六、十、
幸、あ、つ、て、千、五、百、に、達、し、た、の、あ、つ、ま、す、
も、
見、今、の、ち、稀、れ、な、手、に、入、つ、た、の、あ、つ、ま、す、在、り、と
知、ん、て、あ、つ、ま、す、今、高、千、五、百、に、入、つ、た、の、あ、つ、ま、す、
か、ら、さ、し、た、と、ん、な、い、あ、つ、ま、す、か、七、百、に、入、つ、た、の、あ、つ、ま、す、
初、百、種、を、得、ん、と、心、掛、け、た、時、高、五、百、種、に、達、し、た、ら
じ、ま、ん、と、思、つ、た、時、の、事、と、追、憶、し、
、

志の餘りなればあつたことを失笑せざるを得ま
人、荒し百種ある程度に止りしむるは、多
分私し、寸珍本の五種以上のものよと人をも
り自らカス板に信し比てあつたを、然るも
し、（？）の千冊あるも連してみますと何となく無
限あるやうにも思ひんも、披あつて見れば五
種以上千種以上もありあり、（？）のことを思ひます
と志の小なる可らざる、（？）の微物のサ鬼集、
就をも教訓を兼ね依りたる就をも會得せんま
す

集めよう、千冊百種冊数ハ多分三千と超へるべ
ありませうか、此本に就てアラツボリ觀察して見ま

すと、古版本が甚に少る、日本版の寸見文、續
所元禄位か最古なく、支那版の、明版以前の
もの、一冊手入りもせん、大形の本の七度、長荒
く、いさゝか、支那に於て、明以前の本の極め、少る
譯のあつたから、少るいりも、（？）、日本版
む寸珍本の最も多く出来たのを文化文政、あつた
ら、（？）の後の連も、益々多く、明治の十一、二、三
年頃、銅版の小本が、成光に出た、支那に輸出せられ
るもの少く、大體古版本の形ハ少く、（？）
版式が整つておまへん、本の形の小さる、割合、二、三
郎が、大きかり、字が、大き過ぎ、（？）の格好がよ
ろしく、（？）、元禄、あつたから、違つて、体裁が、細く、挿

繪本加のやりのまらて来れば、**化政**は大いに敷つた
うに**化政**頃からであり、銅版や石印や活版
るものが行はるやうになり、**文政**ころに**晴岸**申吟
香寸歌本は多く出まると、**化政**も多くの自叙傳
てあまた、**文政**と又各部門に分つたどの部類の者が
多いかといふは、詩が最も多く、**文政**ころに**文政**の
ころ、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
人用の書ものもあつた、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの
漢類七百種七あり、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの
種、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
書(法帖類)五十種、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの
此種、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの

十数種、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
或は、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
三百種位あり、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
十、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
私小本の蒐集、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
やうな研究を、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
私小本の発行、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
一ルが、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
其専門の書籍があり、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの
ブライースと云ふ店に、**文政**ころに**文政**ころの**文政**ころの**文政**ころの

いよび其目錄を見ますと、アクリレミレーが載せ
てありませうが、**目録**のめがねで見ると、**見**のハ見入る
程の小本もあつます、大体聖書や詩集が多く出
版してあつます、セーリスピアの全集か五寸程の
高ヤの回轉書架を二版と畫して收めてあつ
たの日本、七渡つてあつます、日本も七離本を
専ら心つた書肆がある様にあつます、亦古今
集を始め三代集八代集と**華本**、**薄葉豆本**
び出した書店もあつます、亦小兒用婦人用の繪
本を出した書店もあつます、**啓本**書店の名かハ
ツキリ知んません、多分小本出版を専らとす、此本屋
ハ興いのひあつます、勿論岸田吟香の樂義堂也

精録あを賣る傍ら書物も賣りません、**石**
印の寸珍本を心つたヤ耶と翰出さう、**其**の種類
ハ少くもあつませんから、**ヤ**、専門の相を備へ
てあると申せません、尙ほ私しの知りたと思
へません、**古来**小本を喜にむかし自ら作りまし
た人ハ誰んかあつたことか、**知りません**、**た**
た、**唯**九近世**本**趣味のあつた人ハ、**田**、**能**、**村**
竹田、**館**、**柳**、**清**、**松**、**浦**、**武**、**四**、**郎**、位しか知らんません
竹田ハ今才調集も寸珍本ハ重刻して其の序に小本
趣味を明記し、小本の便利なることをいふ、**奉**
けて、大を粗るん、**ふ**、**を**、**精**、**る**、**る**、**荒**、**か**
と申しておろません、**柳**、**清**の心つた本ハ、**林**、**園**、**月**、**令**

所ハ

を初めとし、晚唐詩集、王國荊公詩集等多くの
詩集を改題し、その形が皆大同形の小本でありま
す。小本の趣味のあつたことが、この類のいふまでも、多分柳
湾の公版物が日乾とるう、多分に倣ふ所のあつた
と思ひます。柳湾以後、追々出たもの、此形は、
松浦武四郎の自心の紀行七八種、其他綴書、
も、便覧、の類、そのを皆、小本にしてあつた
一冊、二冊の室を心の好む事家ひうか、久米
小本、趣味のあつたものと見、つた、一冊、二冊を心の
人として木片を全回に勧進し、其の材を集め
て出来た室を披露する、為め、版、り、木片、
勧進」と題す。書物七寸、紙本、あり、つた、

私に研究した内、其の要領を得たもの、小本を出改す
原因、動機、は、多う、その動機と原因が、同様の、小
本、多し、自身を説明し、ます、から、大略、左、要、點、を
掲げて見、せ、う、

第一 携り帯の便利 交通の不便な世の中、長い旅

行、る、か、する、時、荷物、の、出、入、の、為、の、書、物、を、携、り、
帯、が、出、来、ぬ、為、に、應、ず、る、以、因、小、本、の、出、来、の、
ハ、自然、の、勢、の、あ、る、支、那、の、や、う、な、大、き、な、團、子、
② 官吏、の、屢、々、の、交、渉、を、行、ふ、為、に、鐵、道、十、何、七、五、
から、書、物、の、運、搬、の、容、易、を、求、む、の、為、に、市、相、本、
を、請、法、が、る、の、也、

常、携、り、書、物、柄、當、に、携、り、帯、を、要、す、る、こ、の、が、あ、る、

例ハ詩人の歌書に於ける、佛書の佛書に於ける、謡曲家の謡本に於ける、宗匠家の聖書佛典に於ける、技師のガイドブックに於ける、測量師のフォルミヨウに於ける、比留隨時必用を感ずるものがある、手輕に懐中に入れ得る本を要する、

尚ほ常住坐臥身を離し難いものもある、神佛の守護符のことも、割の類々がある、守護符と云ハ書物外である、板紙が必ずしも守札のみならず、佛教に於て心行や普門の書物を守りとするものもある、神道に神名簿を記し守りとするものもある、割

るものもある、の表紙 割札を記しする書物が附属するものがある、

中二小品をハ折合のぬ境へ

小兒ハ多ん自身や品ひあるから、その用である所の書物の如きもおのづから得ぬ玩具的畫本の如き可愛移入心るものか、世界通心ある、婦人に至つてハ小兒とあるが、最も小きよあかその優味を調和する随つて婦人の^{古くは}儀法の方や化粧の本、^{古くは}や往来の^{古くは}皆極めしやて、出来てゐる

言ふまでもなく、離煙を備ふる書物も小

もろもろを得ぬ、内裏扱と雖、他の人物も小
児もよまへまゝなるか故に、一切の調度
と調和せしめるは、小本を要する、他
つと雖、本心源氏物語や百人一首や、應小謡
百首者も、昔から出来てある

用器の小なる為の小本を要する、場合もある、
例へば婦人のハユセエに納める本、豆本
びるゆんばり、又昔しハガラ、くしとろ、小
貝等の形、心づつ、中、小品の玩具を入
れ、ハ、コンナ中に入る繪本、ちり、勿論、何
程、小形の豆本、むろ、けん、ハ、ろ、ろ、ぬ、

尚ほ、近世昔茶家ハ、久、籍、ハ、小品の茶

器を玩ぶこと、より、比、加、斯、小品、折、合、小、机
上の装飾用、ハ、圖書、ろ、ろ、書、画、帖、ろ、ろ、
小品、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、得、ぬ、事、宜、ハ、松、七、
茶家ハ、小品、圖書、を、珍、とする、ろ、ろ、ハ、ろ、ろ、
ハ、ハ、調、和、を、ぬ、ろ、ろ、ぬ、

ホ三 紀察を要する為の

支那、ハ、感、光、ハ、種、々、種、々、試、験、用、の、小、本、が、出、来、
て、ある、この、科、本、七、八、を、登、用、し、ハ、時、代、
ハ、考、試、の、時、に、受、験、者、が、懐、中、に、忍、び、て、
乙、日、カ、ン、ニ、ン、グ、を、や、る、道、具、ハ、表、向、
推、の、帯、巾、を、許、さ、ろ、ろ、の、こ、ろ、の、ひ、あ、る、
尚、ほ、春、畫、ハ、春、の、装、束、
の、よ、ろ、ろ、と、禁

せんとあるよらんが、まぬの人の紙入に此
物が入つておふ、若しの御殿止中一のハ
セヨウの~~丸~~こんが滑んじおた、春書こハ
品の多くあるのを此の故にあらう
宗教上の儀式に頗る複雑のよふあつ
てその順序次第を記憶することか難
い、そこで其の次序を小さる豆本に凡つ
て之れを指の間に挿入し、式場の内證
に之れを覚えておく、又張り此部類に属
するよふあらう。

才四 調法主義

大部の書物を小形に縮刷するのハ、前掲

けり運搬の便利から来ておるが、まれば
かりび無の読会に持ち運ぶ必要ハ
なくとも、如斯き調法は、一冊
若くハ^三冊に縮刷してあるハ、幾十冊を翻
へすらも便利である、宗書ならぬの如く、
又用ゆるよらんハ、尤も此の便を感するす
べし多く流布してある書物の小冊に縮
刷してあるのは、運搬指の帯に便する
はかりとて、一家に大本の外、小本の
備へし、中まを調ハ、このが調法に
から、書物の性質を信するハ、幾番より
あつてもよらん、かた

才五

大形本を要せざるもの

書物の内容の大形本を要せざるものか
いくともある、目例へハ人名録の如き、圖書
其他物品の目録の如き、簡單なる格類
の如き、俳諧詩歌の類題の如き、比喩
一行或許七字数の無いものハ小本又
作ふハ紙の経滿するにばかりの体裁
七のいものもある、能向らしと七十七字位
あるから此部類に入る、亦印ハ間々大
量のものもある、~~例ハ~~通例小本が多
多からる、~~例ハ~~こんも小本に属する、随つ
て印譜の小本が多い

才六

書家之道楽

歌と廣く流布を目的とするもの、
家が道楽の小本を心づて知己と配つたりして
自ら興することがある、~~例ハ~~つらつと稀
にある、如斯きハ、~~例ハ~~宮利父のことであ
るから、版刻も印刷も装釘も美び、~~例ハ~~
形も殊るものがある、~~例ハ~~珠と奇を術の考
め、國外の形を小さくし、~~例ハ~~織細の回
まを、~~例ハ~~小本の上乗
るものハ、此の道楽本に限るとも云へる、
此の道楽は、二流の流んがある、~~例ハ~~思
道楽の意味から自作の詩歌的句

刻印の類

画を大木^のに出す^のは、^の罪の無いやり方であるが、之れと及
對の流をある、是れ態と皮肉に本
を作つて、大なる物を作る人にて、衡く
よるある、の此方を聊か罪もあるけ
んと斯る流に属する道楽者流の作
こ、継々逆品のあつたよ、

亦七 縮少術の進歩に起因して

縮少術の昔めと進歩は、本製心の上り一
革命を起す、先づ寫真術が起
り、之れを銅版に移し、藥劑が凸凹
の面を生ずる、之れが直る版とする、

であるから、之れを便利なること、無い、昔し
の軟心版の銅版の及び、難の精刻である
ます、けいも、原本を、之れをつくり、その後
縮少すること、出来う、つて、画びき書ひ
^{書き更す為め}
^{又原本の味を}
失つたが、

此術を行ふに時、人の好意心に馳ら
れ、この種々のものを縮刷した、多くの西復
刻も、原寸大の此法と據つたが、玩具とい
としい、繪畫類が多くと出た、是れハ錦
繪、之れを、一寸四方、甚しき、ハ出、此目、ハ

びやけん人見へるい位な結刷をやつて人
 を敬むか、此、このか着のよ、小品趣味を可
 るうにそのつ比やういある、そのんから、後
 日石印が起り、銅版の缺點を補ふ、
 作書の會、下書家用、供さる、軟味のあふ
 鮮明な版、よか出来、このやうなる、小本
 を此のよ、一層便利を、
 知る、あり、いある、佛し趣味家、
 木彫の結刷を好んでゐる、
 結刷、七宝、真術を應用、
 の賜と云い、
 此の文は文化

④ 小本の製造さへる原因動機へおよそを、
 名、蒐集、比多くの中、
 るか、その等級を知り、
 といの寄物を陳列し、
 為、
 かの、
 つに、よか、
 曲の説、

一 既、小本を可とする、
 理想的、
 小、
 ハ、

屬するが、是れもさし小るゝもの眼鏡を掛かり
るけん、口讀み難め、自分の集の以内なる
此寸尺のものも、さしけん、和北形の手俵大
作をすすも、如此も、實際取扱が困難に
あるから、いくらか小のものを二倍大即ち堅手
位を最下の限度とし、

二 小本に最も適する紙の薄葉心ある、此紙を
用へん、字幅が減じ、すたくし、手書きの原力
がある、開閉の呼吸がよろしい

三 版式、木彫の校正版を可とする、銅版や石印
や活版を心する、字がかか、らう、文、さ、ん、だ、け
品格が落ち、細字の校正版、彫、彫、の、彫、の

元七難入する所がある、ゆけ、さ、し、の、校、用、紙、も
有り、趣、味、も、ある

四 山崎本七一概、排、志、を、あ、ら、へ、在、家、の、自、業、に、精
方を注い、た、もの、最も、歡迎、する、べき、もの、である、
併し、其、美、する、細字、を、修、ること、は、常、に、難
く、若し、随、分、を、能、く、する、人、も、あ、ら、う、が、今、は
或、と、無、い、所、綴、を、欠、く、悪、筆、字、を、と、銅、版、石
印、の、者、の、い、ふ、お、ま、り、を、

五 捨、り、あ、ら、う、き、い、の、さ、ん、給、か、ら、い、移、り、か、あ、ん
ハ、別、れ、ら、う、し、

六 体裁、美、を、欲、する、小、る、ん、が、小、る、る、を、**体裁**
の不備、が目、に、立つ、もの、がある、若し、の、寛、文、あ

づの大本と匡郭が割合に大きい為る天
 地の故向が少く、字形も割合方大きい
 ら体裁も果は不備がある、どうして大本
 を五つくり或る割合に縮少し、此体裁は無
 んにすゝぬ

七

装釘も大本と同て無けんが、
 故を以て有略がある、困る、勿論装
 釘の形式は卷子は冊子の七列蝶綴り
 せらる、いが大きいと同一を欲する
 冊子もん心帙を要する、亦箱も附属
 してゐる

書物の内容も普通紙数の多からざる

ハ トシナ書物が小本の心でゐるかの、
 紙数の少くは心帙が刻込んである、
 心經といふ書門品といふ百人一首といふやうな
 有り縮んだものが、
 る、心帙の心、
 も、又刻すも容易かあるか、
 が、望ましいこと、大部の書物が、
 の大きき形を刻さん、三十冊五十冊の
 けら、
 氏拍快の維壇用、
 けん、
 ルとありあり玩果さる、
 鋼版や石印の

稿々大部のものが出来ておる。● 整改の論曲本
ちよか最々大部のものがあろう

要するに本が本を喜ばるべき條件は乃ち大本を喜ばるべき
の條件に形の大十の別がある。● 此の事、比
私のコレクションの内、前掲の諸項にハマル理想的
のものも幾らかあるけれども、極めて小形な玩具
に似て、大部のものも故に出来ておる。● 此の
やも庫あき比々面白い趣がある。但し三冊は少々の
本を雑然と一室にさくらけ出し、又少くも人の
書物市に臨んば極々妙々趣々あるが、一々之を把
つて見ると趣味を元々のものが甚だ少々の私か
肉筆の書書の最々形のものも百々々々添くもの

● 素然の毎味、幾くか趣味を加へんとし、
● 外見の補いと比のむあまのす

近頃聞く所、授けまると、英吉利に、ある商業の
組合、より皇位陛下に人形の家をむつて、扱ふ
か、極めて小さな建築模型の如き家を、就
し比々の家屋、電話、自動車、及び百般の
物用のもの、悉く備へり、一室が圖書室とすつて
おる。● 是れを親指程の豆本が無数に積み、当代
名家の自筆、● 本が、縮寫めて映写せんと、その
び二百種あると申し、● 流石に好ま
か、爰に到つては、徹底し比々の、日本の(遠)感
から、古来、こんと較べることの出来の例、一つある

見出(並)物(平)身

○二月廿七日ある日教業中、神田本町の玉店にて得る本の
圓者一二冊あり心きまのあり

一 韓待外傳

五冊

春世皇の考行傳版ニ村瀬栲亭卷首ニ別
本ニ就て教を補字し、教語類ニ細注を施
し、なるまゝ、源氏家傳の印記あるは栲
亭の卷出印あり、依作家の印あるは栲
亭の秋田藩に於ける松本と云は候家
に在る所以あり、此書丸十枚とすべし
價六十圓也

一 列子と南宮口義

四冊

此書七又依作氏の圓者あり寛永四年

の刊に係る巻尾に左の三行を刻す

皆寛永四曆算次下外曆月吉旦
洛陽烏丸通大炊町

安田其昌新刊于谷藤亭

此書安田其昌の先哲書名法に其日師
を殺し其書跡を載す其何の故乎
を知らず尚考あべし

一 森立之紙碑

一冊

森養牛自家の傳を撰み因如願
了る小冊を一人其他の補傳を叙す

一 松秀園書法

一冊

此書長濱の成主増山雪南の著す

所より雪南の書法を能くす、法彦守
傑出の人より、余が架守此人の書を刊
し、其墨法四五あり、書名六元より是より而
して越前府をめぐりし事、此書後
こより初めて其書を得たり

一 山陽朱批坂井福山の文箱

一卷

坂井福山の山陽が其の書を録し、後集
より文箱数枚の箱数枚、山陽の加
筆ありて評語を附す、其次の集
年、瑞澤館に附して一書とあり、卷
首に晴雪風の序あり、巻尾に二跋
あり、山陽研六に扶新とあり、其

とよ、いんまを日こ爾んてゝよの也。

一 高用通語

一冊

寛政七年小島某の編に係る、英米蘭
三語を列ねて日用語を編す、此部
乾の玉の稀を也、但し原語を欠
き、英米語の音に誤多し

一 臺灣鄭氏紀事

三冊

此下分多く流布する者、此者原撰
るに大本より、鄭大定注の佛の爲
るに書首の叙白に、即佛自序
の左の漢語あり

此者

各中納言鼎正公便其臣川口長
儒助之於外臣大定注、行思
今茲三月之災、家花を以、裁
爲鳥有、無復架之、可揮、因
納之、公府長爲、彼中之、終
云

己丑八朔大定注行記

此者亦秋田坊林侯の家より出づ

一 今川鏡解

一冊

元祿の刊本より、考へ解りし

一 和漢朗詠集

二冊

世尊寺行平の筆經本を映写したるもの
この時代の時代あり、ヨコト註の附しあり
この最もまことふべし、弘前の酒江氏の
爲記の爲森主との爲記也

○大政の友人大谷昭徳出京ニ付高田前略と云々振ると
其の旅舎に別又旅舎に染地ニ有る也云々、新築
成り洲葉前との所、門々入ると云々、巨漢の旅舎
の門札を打ちつゝあるを見、これに旅舎の主人として
當りて前能界に所見ありし大錦なることあるを
知んたり、此家梅道と云ふもの、主婦ハ七と馬道の
春帆橋の婢と云大錦と嫁ハ七と云ふもの、此を
十七貫の大体格と云答也、出づ、酒席に就

旋す、此家も圓向ふの歎因底をしく、尾は、
あるもの、野猪の肉と云ふもの、七貫ありて、
好味舌を鼓す、余爲り、量と云す、一快也
此の六又刻し、東台梅の喜と云、圓腹合と、
如のそ高村光雲と云、此人彫刻家の大家也
此七千五と云く、名も、明變鏝、席上維
新の海神佛混淆と、妙し、隆の思ひ出、
を一時分、あり、事、本、大、
羅漢寺の、関、羅漢寺、
度が、捨、を、五、羅漢、
置き、這々の、卷、北の羅漢、
、サ、半、一種、佛、

そんて百体の祝言を置さしりし、その神佛混在を
の禁令に思はるる体の祝言は無施能に之夕が子母
を、そより死にせん、徳らぬを運ん將さる火や
二階投日(其の塗金を取らん為め)せらんを
刹那光雲の河が守りし、そんてせつけ其の
る体の内にも名心五体を撰び出し、河の利を待
つ内河も来りてそんて一合二朱に結ぶて平
あして名心を救ひ上げ、其中の二体松雲の鬼
ハ今、身雲の家になりといふ、因に記しておくが、この
松雲又、カと京都の佛の河、そんて佛つて入つれ
の心、卯馬流の石佛をえ、河の石羅漢を心、こと
と、心し、れといふ、松雲の心、九兵衛といふ

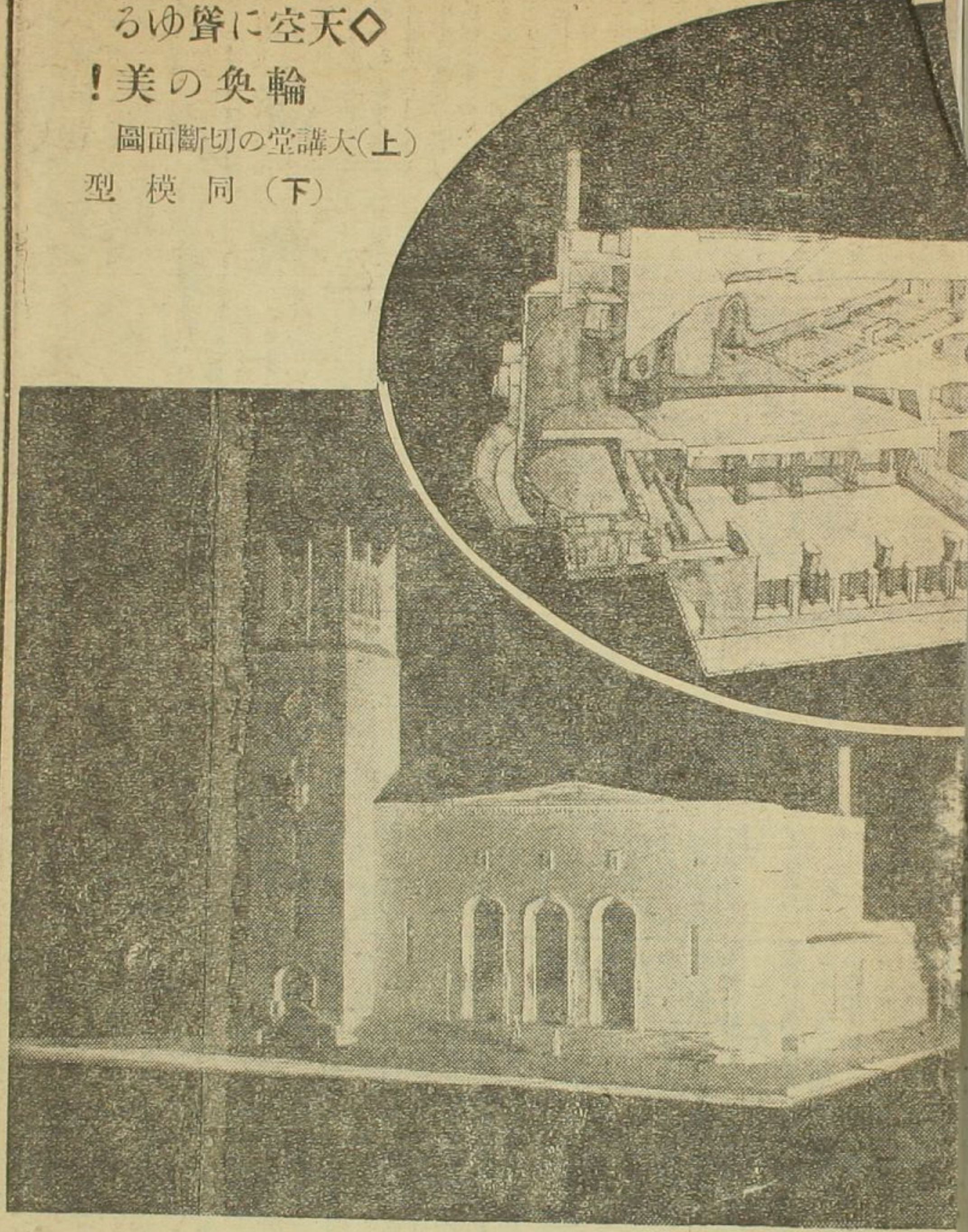
より、其捨をも、若くも、苦心し、此の一番、その初地
の幕に、居し、此の、札差の伊勢屋、其左、右の、道
、他の、札差、十六、軒、七、之、の、又、倣、い、四、代、将、軍、の、大
奥、に、す、こ、え、ぬ、中、に、も、ま、の、道、を、得、に、は、歴、も、あ、る、後
、日、の、大、名、か、も、ま、の、道、か、あ、つ、た、といふ、五、代、将、軍、の、為
つ、に、将、軍、の、折、に、出、寺、と、立、定、り、佛、殿、の、曾、後、に
、天、の、照、太、神、を、祀、り、み、ま、ま、あ、る、き、なる、の、後、と、ま
、も、あ、る、松、雲、と、定、り、七、身、に、致、し、た、といふ、
酒、次、光、雲、の、佛、像、の、つ、き、い、ろ、く、の、事、を、ま、ま、に
得、る、中、に、記、帳、に、存、す、る、山、陰、名、松、江、に、鯉
淵、寺、と、い、ふ、あ、る、寺、に、推、古、親、の、佛、像
一、基、あ、る、其、の、寺、に、刻、字、も、あ、る、と、い、ふ、(後)

るゆ管に空天◇

!美の奘輪

圖面斷切の堂講大(上)

型模同(下)



なのだ。此塔は大正初めにアトラクタイヴに表はすために塔の上部には時計台を設けて時の統一を 圖り、更に其内にはチエーノベルを釣るしてある時には校歌のシンギングにワセダニヤの胸を離かせ時を報する鐘の音をまた思ひ出の響と仕様とする

でその似てゐる人が好きな人に似てゐればまだ少しでも好意がもて嫌な人に似てゐる時はその寫眞までが憎悪を感じる。要するにその寫眞から欠點を知つてゐる人の類似點を發見する位でとてもその寫眞からどうして純粹な批判が得られよう。そさばかりか、その寫眞に對して、この人はハンサムだとかマンリーだとか云つて單なる好奇心から假りにも批評することはその寫眞の人に對する非人格的な冒瀆であるやうな氣がした彼女はもう知らない人の寫眞を故意に見せつけられることは感々してしまつた

それから彼女は母が見せると云つて出す寫眞も最早見なくなつて仕舞つたこゝに置けば彼女が見るだらうとわざと彼女の机の上に置いてあつたにしても彼女は怒りに燃へて母の膝に投げつけたりした

品々、多々とも附山の心算あり久しく花をえ
 或る狂人一体の佛を鷲の淵に投ししを出来
 たり現りたる二魁の伴を牙、福しなる也と
 の候、一体の不動の像といふ、此の推古佛の一見
 の候、値あるものと云ふ



創作 緋鯉 竹中みき

「何分とどうぞ宜しく」それはどつしりした父の聲であつた。「エーそりやもう何です...

教授お顔拜見 (其の十二) 本多淺次郎氏

「いたゞいて氏も亦老いざる哉と今更其の感を深うするのであるが其のよどみなき巧みな講義と、あの...

ひとよざり 大友力藏

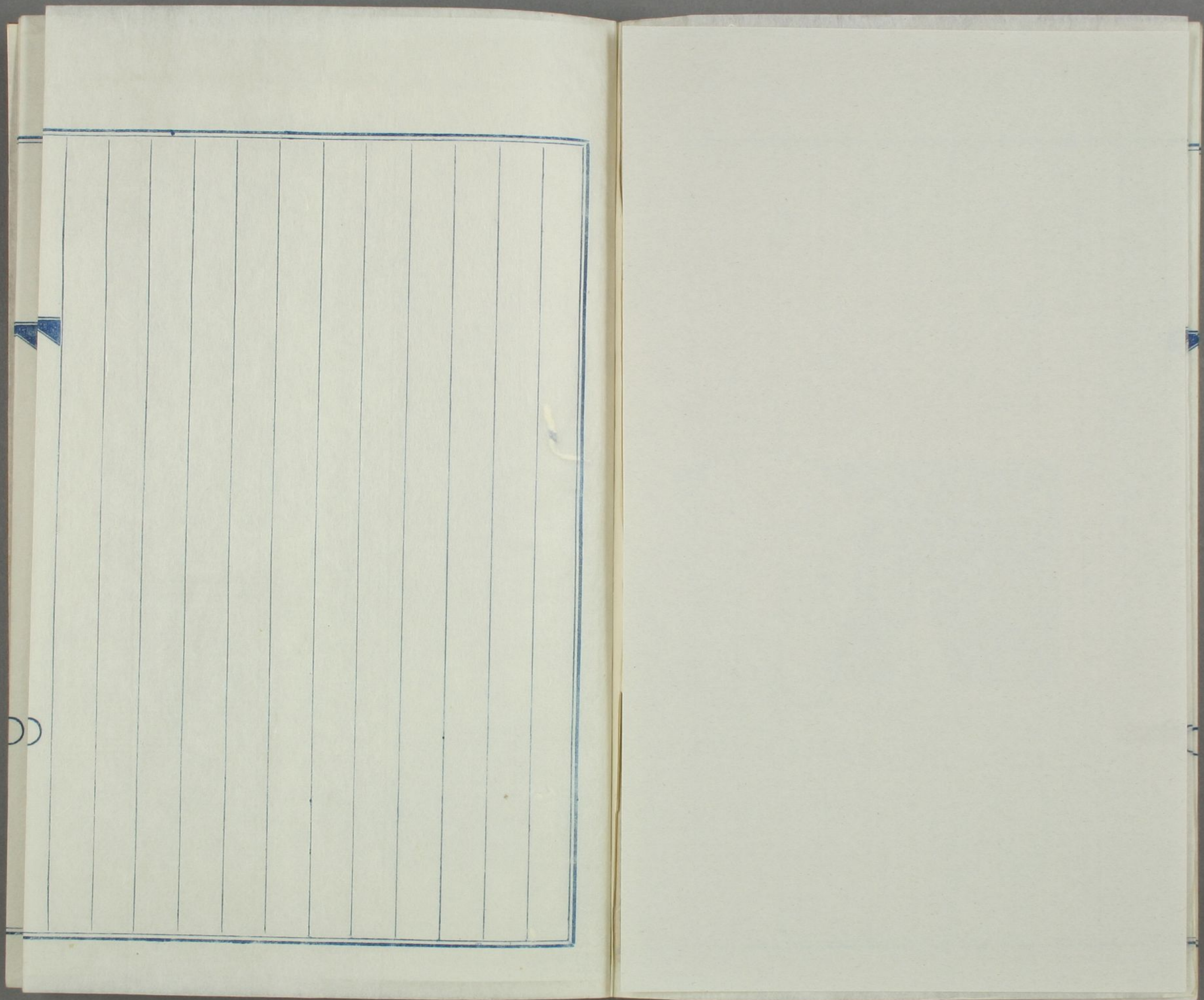
「何んか云ひましても知らない他人さんにはさう心配されるのも無理はない...

Cyrano de Bergerac advertisement featuring a portrait of the character and text: 本多教授尊顔謹鳴 23 JANUARY 23 JANUARY 23 JANUARY

屈な人格の持主でないといふことを判然と露言したいのを皆まで云はないので父の後を繼いで少し許...

「何んか云ひましても知らない他人さんにはさう心配されるのも無理はない... 彼女は憎悪のつと高潮した呪ひにまで彼の家への出入を恨ん...

「何んか云ひましても知らない他人さんにはさう心配されるのも無理はない... 彼女は憎悪のつと高潮した呪ひにまで彼の家への出入を恨ん...





攝政宮殿下には去る大正十二年春臺灣に行啓遊ばされたが、その節御休憩所とせられた一小亭の竹の柱にその夏青々とした新芽が萌えいでた。同小亭の所有者はこれを目出度きこととし、行啓記念として、その芽を育成し、その跡に記念碑を建てて、育成したゆかりの竹とともに永久の記念とすることとした。なほその後一才ならずして皇孫殿下御降誕の御慶事に接し、その所有者は、此處に竹の園生の御繁榮を目的あたりこの竹の芽に象徴せられたのに接し、殊のほかこの記念の竹を愛育してゐるとのことである。圖中、左下圖は殿下の御休憩所として竹の柱に芽の屋根の小亭。中圖はその竹の柱に芽の生じたものを、育生中の圖。右圖はその育成せし竹を地に下して生したるもの及びその記念の碑である。(この寫眞は臺灣製糖會社重役平山寅次郎氏より本會々長大隈侯爵に寄せられたものである。)



冊壹 よゑつさ福 宣師川菱

(照參頁六十四)

閱覽室

十二行

